

「資本主義以前」(『資本論』第3部第36章)の草稿について(上)『資本論』第3部第1稿の第5章から

著者	大谷 禎之介
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	69
号	4
ページ	165-234
発行年	2002-03-28
URL	http://hdl.handle.net/10114/1482

「資本主義以前」(『資本論』第3部第36章) の草稿について(上)

——『資本論』第3部第1稿の第5章から——

大谷 禎之介

目 次

はじめに

- 1 第36章の草稿、それとエンゲルス版との相違ないし関係
(以上、本号所載)
- 2 第36章の草稿について

はじめに

本稿が取り扱うのは、マルクスの『資本論』第3部第1稿の「第5章 利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本」のうち、エンゲルスが『資本論』第3部を編集するさいに、その第5篇第36章に利用した部分である。マルクスの草稿ではその393-404ページであり、第3部第1稿を収録したMEGA第2部第4巻第2分冊では646ページから664ページに当たる。草稿の第5章のなかにはマルクス自身によって書かれた1)~6)の表題番号ないし表題番号をもつ見出しがあるので、これに従えば第5章は六つの部分から成っていると見ることができるが、本稿の対象はそのうちの最後の部分である。

マルクスはこの部分の最初に „6) Vorbürgerliches“ というタイトルを書いているが、エンゲルスは彼の第3部編集でこの部分を使って第36章を

まとめるさいに、この章に „Vorkapitalistisches“ というタイトルをつけた。直接には「前資本主義的なことども」という意味でしかないこの Vorkapitalistisches という語には、長谷部文雄訳では「先資本主義的なもの」、岡崎次郎訳では「資本主義以前」、新日本出版社新訳では「資本主義以前〔の状態〕」、英語版では（モスクワ版でも Collected Works でも）pre-capitalist relationships、フランス語訳では、Éditions sociales 版で notes sur la période précapitaliste、リュベール版で remarque sur l'usure précapitaliste、ロシア語版では докапиталистические отношения と、さまざまな訳語が与えられている。本稿では、英語版及びロシア語版と同じく、Vorkapitalistisches を「前資本主義的諸関係」と訳し、それに対応して Vorbürgerliches を「前ブルジョア的諸関係」と訳しておく。ただ、本稿のタイトルでは Vorkapitalistisches を、これまで同様、岡崎訳に合わせて「資本主義以前」としておく。

本稿では、草稿の内容とこの内容に関連する問題とについて若干の検討を行なうとともに、第3部第1稿についてのこれまでの一連の拙稿¹⁾とはほぼ同様のしかたで、草稿の訳文を掲げ、第3部の MEGA 版の付属資料の「異文目録」、「訂正目録」、「注解」から、該当する部分を訳出、注記し、

1) いずれも『経済志林』に掲載された以下の拙稿を参照されたい。①「『貨幣取扱資本』（『資本論』第3部第19章）の草稿について」、第50巻第3・4号、1983年。②「『信用と架空資本』（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）」、第51巻第3号、1983年。③「『資本主義的生産における信用の役割』（『資本論』第3部第27章）の草稿について」、第52巻第3・4号、1985年。④「『利子生み資本』（『資本論』第3部第21章）の草稿について」、第56巻第3号、1988年。⑤「『利潤の分割』（『資本論』第3部第22章）の草稿について」、第56巻第4号、1989年。⑥「『利子と企業者利得』（『資本論』第3部第23章）の草稿について」、第57巻第1号、1989年。⑦「『資本関係の外面化』（『資本論』第3部第24章）の草稿について」、第57巻第2号、1989年。⑧「『貨幣資本の蓄積』（『資本論』第3部第26章）の草稿について」、第57巻第4号、1990年。⑨「『流通手段と資本』（『資本論』第3部第28章）の草稿について」、第61巻第3号、1993年。⑩「『銀行資本の構成部分』（『資本論』第3部第29章）の草稿について」、第63巻第1号、1995年。⑪「『貨幣資本と現実資本』（『資本論』第3部第30（32章）の草稿について」、第64巻第4号、1997年。⑫「『信用制度下の流通手段』および『通貨原理と1844年の銀行立法』（『資本論』第3部第33章および第34章）の草稿について」、第67巻第2号、1999年。⑬「『貴金属と為替相場』（『資本論』第3部第35章）の草稿について」、第69巻第3号、2001年。なお、本稿でこれらのものに言及するときには、タイトルのみを掲げる。

さらに草稿とエンゲルス版との関連を注記する。

ただし、これまでの拙稿ではおおむね、まず草稿の内容などについての筆者の検討を置き、そのあとに草稿の訳文を掲げるという仕方をとってきたのであるが、今回は原稿の締め切りまでに、こうした仕方ですべてを仕上げるができなかった。しかし、敬愛する阿部正昭教授の「退任記念論文集」になんとしても一本を寄せたいと願ってきたので、すでに仕上がっている「第36章の草稿、それとエンゲルス版との相違ないし関係」の部分だけを先行させ、草稿の内容についての考証ないし検討は続稿に回すことにした。

ただ一つだけ、あらかじめお断わりしておかなければならないことがある。それは、MEGAで第3部第1稿が公表されたのちは、拙稿での訳文の底本には基本的にはMEGA版を使用してきたけれども、今回は一部で、草稿のページをMEGA版とは異なる順序に置いているということである。MEGAは草稿の諸ページを、草稿に加えられた変更ののちに残されている最後のページづけの順に置いているのにたいして、本稿でとった順序は、マルクスがこの「6) 前ブルジョア的諸関係」を一応書き終えたときに草稿の諸ページがもっていたのではないかと筆者が考えている順序である。具体的には、MEGAが、393ページから404ページにいたる、草稿に残されている最後のページ付けの順序に従っているのにたいして、本稿では、そのうちの397-398ページ(399ページは欠番で存在しない)の2ページと400-401ページの2ページとを入れ替えて、後者の400-401ページを前者の397-398ページのまえに置いている。筆者がこのような順序を推定した根拠については続稿で詳述するが、本稿につけた筆者の注記からもすでにおおよそのところは推測できるであろう。読者の皆さんには、とりあえず全体を本稿での順序で虚心に読み通してみてくださるようお願いしたい。そのうえで、これをMEGA版での順序およびエンゲルス版での順序と対比されるなら、本稿での順序つまりマルクスが執筆したときの順序に置かれたときに草稿が示す一貫した文脈を感じ取っていただけるので

はないかと考えている。

1 第36章の草稿、それとエンゲルス版との相違ないし関係

本節では36章原草稿を見る。これまでと同様に、草稿からの訳文をかがけて、それに、第1に、MEGA版(MEGA, II/4.2)の「付属資料〔Apparat〕」に収められた「異文目録」,「訂正目録」,「注解」のなかから該当する部分を注記し、第2に、草稿とエンゲルス版との関係を、エンゲルスが草稿にどのように手を入れたか、というかたちで注記する。

注のなかで用いる記号類は、これまでのものと同じである。なお訳文には、エンゲルス版に利用されている部分については、これまで同様、主として岡崎次郎氏の訳を参照した。

草稿本文中の{ }はマルクスによる角括弧、[]による挿入はMEGAの編集者によるもの、〔 〕による挿入は筆者によるものである。下線による強調は、とくに注記しないかぎり、すべてマルクスの草稿における、1本の下線による強調であり、MEGAではイタリックによって示されているものである。エンゲルス版では、この強調は原則として省かれた。筆者の強調は上付きの傍点で示す。MEGAの注解に収められている、引用の原文にある強調も上付の傍点で示す。

草稿ページは下記の記号で示す。MEGA版では、草稿ページの表示があるだけであるが、マルクスは、第3部のテキストとするつもりで書いた箇所では、それぞれのページを折って上下の二つの部分に分け、上半部にはテキストを書き、下半部をそれへの脚注や追加などを書き加えるために使っているのであって、このような使い方が行なわれているページと、そうではなくてページの全体をフルに使っているページとを区別することには考証上の重要な意味がある。本稿で取り扱う「6) 前ブルジョア的諸関係」では、全ページが、上下二つの部分を分けて使われており、基本的には——最後のメモの部分を除けば——第3部のテキストとして書かれたも

のと見られる。総括的にこのことを述べておけば、それぞれのページを上下に分けて示す必要はないと考えられるので、本稿では上下の表示は省き、各ページの初めと終りだけを次のような仕方で示すことにする。

| 372 | 逼迫期... ここから372ページが始まる。

/374/ 【原注】... ここから374ページの中途にある部分が始まる。

……ある。| ここまでのページが終わる。

……ある。/ ページのこの部分には、このあとになんらかの記述があることを示す。

草稿のうち本稿に収めた部分は MEGA 版では「テキストの部」の646ページ19行～664ページ29行であるが、この MEGA 版のページはその最初のところに 646 のように記した。

草稿のページについても MEGA 版のページについても、ページの変わり目が文の中途である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

テキストへの注記にかんする約束事は、次のとおりである。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのまえに「【原注】」と記し、その末尾を「【原注…終り】」で示す。

MEGA 版の「付属資料」による注記は、パラグラフごとに、本文中の該当箇所の直前に丸つき数字の注番号をつけ、パラグラフのあとに一括して掲げた。そのさい、それぞれの注番号のあとに、「異文目録 [Variantenverzeichnis]」からのものには「〔異文〕」, 「訂正目録 [Korrekturenverzeichnis]」からのものには「〔訂正〕」, 「注解 [Anmerkungen]」からのものには「〔注解〕」と記した。異文注では、MEGA での記載にならって、最初にテキストにあるものを掲げ、それがどのように変更されてきたものかを示す、という仕方をとった。たとえば、「 $A \leftarrow B \leftarrow C$ 」となっている場合には、草稿テキストで A となっている部分が B を訂正したものであり、B がさらにまた C を訂正したものであることを示しているわけ

である。書き加えおよび削除については、いちいちその旨を記した。

筆者による注記は、該当箇所直前または直後にアラビア数字の通し番号をつけ、各ページの下部に脚注として掲げた。草稿の各箇所とエンゲルス版との対応関係を記載するとき、および、欄外の書き込みを記載するときには、注番号を該当箇所の直前に置き、それ以外については、原則として該当箇所直後に置いた。

草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当箇所をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようなになっているかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAとなっている部分がエンゲルス版ではBに変えられたことを示し、「A——削除」は、草稿中のAがエンゲルス版では削除されたことを、「挿入——A」は、エンゲルス版ではここにAが挿入されたことを示す。

草稿とエンゲルス版との相違についての注記にあたっては、エンゲルス版が草稿と内容的に異なっているときに、その相違を記載することを原則とする。エンゲルスの手入れは、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の -ung 形と -en 形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、等々。また、英語で書かれている部分をドイツ語に変更しただけの箇所や、それに類するドイツ語の表現の変更などで、日本語の訳文にするとまったく変わらないような場合も取らなかった。

646 | ①393 | 6) ¹⁾前ブルジョアの諸関係

①〔異文〕「393」←「385」〔MEGAは、「385」の最後の「5」の解説には確信がもてないとしている。〕

利子生み資本、またはその古風な形態のものは高利資本と呼んでもよいが、それは、その双生の兄弟である商業資本とともに、資本の大洪水以前の形態に属する。すなわち、資本主義的生産様式よりもずっと前からあって非常にさまざまな経済的社会構成体のなかに現われる資本形態に属する。

高利資本の存在のためには、生産物の少なくとも一部分が商品に転化しており商品取扱業と同時に貨幣がそのさまざまな機能において発展しているということのほかには、なにも必要ではない。

高利資本の発展は、商人資本の発展に²⁾(またことに貨幣取扱資本の発展に)³⁾つながっている⁴⁾。

製造工業が①古代の平均的発展よりもずっと低い状態にあった⁵⁾(共和制の⁶⁾後期⁷⁾以後の) 古代ローマでは、商人資本も貨幣取扱資本も高利資本も最高点にまで発展していた⁸⁾(古代的形態のなかでは)。

①〔異文〕「古代の」——あとから書き加えられている。

1) 「前ブルジョアの諸関係〔Vorbürgerliches〕」→「前資本主義的諸関係〔Vorkapitalistisches〕」

2) 「() および後出の「) 」」——削除

3) 「つながっている」—— schließen → anschließen

4) エンゲルス版ではここで改行されていない。

5) 「() および後出の「) 」」——削除。

6) 「後期」→「最後の時代」

7) 「以後の〔seit〕」→「以来の〔von ... an〕」

8) 「() および後出の「) 」」→「——」および「——」

①すでに見たように、貨幣が現われれば必然的に貨幣蓄藏も②現われる。とはいえ、職業的な貨幣蓄藏者は、高利貸に転化するときにはじめて⁹⁾有力になる。

①〔注解〕「すでに見たように」——カール・マルクス『経済学批判。第1分冊』、ベルリン、1859年、105-106ページ（MEGA、第2部第2巻、190ページ）。

②〔異文〕「現われる」←「発展す〔る〕」

商人が貨幣を¹⁰⁾借りるのは、貨幣を用いて利潤をあげるためであり、それを資本として充用する¹¹⁾(支出する)ためである。だから、初期の諸形態のもとで商人に金貸業者が対立するの〔647〕も、近代的資本家に彼が対立するのとまったく同じである。この独自の関係はカトリックの諸大学によっても感知された。そこから次のことが起こった。——「アルカラ、サラマンカ、インゴルシュタット、ブライスガウのフライブルク、マインツ、ケルン、トリニアの諸大学は、相次いで①商業貸付にたいする利子の合法性を承認した。これらの承認の最初の五つは、リヨン市政庁の記録中に保存されており、『高利および利子論』、リヨン、ブリュイゼ・ポントゥス、の付録のなかに印刷されてある。』¹⁾

①〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

【原注】¹²⁾1) M. マリー・オジエ『公信用について、云々』、パリ、1842年、206ページ。【原注1)終り】

9) 「有力に〔serieux〕」→「重要に〔wichtig〕」

10) 「借りる」——leihen → borgen

11) 「(支出する)」→「すなわち支出する」

12) エンゲルス版ではこの原注は引用の末尾に括弧書きされている。

奴隷経済(家長制的なそれではなく後の¹³⁾ローマ・ギリシア時代のそれのような)が致富の手段として¹⁴⁾存在しておりしたがって貨幣が¹⁵⁾(奴隷や土地などの購入によって)他人の労働を取得するための手段であるような、すべての形態のなかでは、貨幣は、それをこのように投下することができるからこそ、資本として増殖できるものとなり、¹⁶⁾利子を生むものとなる。

とはいえ、資本主義的生産様式以前の時代に高利資本が存在するさいの特徴的な形態#には、二つのものがある。私は特徴的な形態と言う。¹⁷⁾¹⁸⁾〔第1に〕浪費をこととする貴人¹⁹⁾(²⁰⁾おもに土地所有者)への貨幣貸付による高利である。²¹⁾第2に、自分自身の労働条件をもっている小生産者への貨幣貸付による高利である。この小生産者のうちには手工業者も含まれているが、しかしまったく独自に農民が含まれている。というのは、そもそも、²²⁾この生産様式が行なわれている状態にあっては、²³⁾農民階級がそうした自給自足の小生産者の大多数をなさざるをえないからである。

13) 「ローマ・ギリシア時代」→「ギリシア・ローマ時代」

14) 「存在しており〔existiren〕」→「存続しており〔bestehen〕」

15) 「()および後出の「) 」」——削除。

16) 「利子を生むもの」—— Zins tragend → zinstragend

17) エンゲルス版では、ここに草稿の次のパラグラフを、注記した変更を加えて、もってきている。

18) 挿入——「この二つの形態というのは、第1に」(エンゲルス版では「第1に」は強調されている。)

19) 「()および後出の「) 」」——削除。

20) 「おもに」—— essentiellement → wesentlich

21) 「第2に」——エンゲルス版では強調されている。

22) 「この生産様式が行なわれている」→「資本主義以前の」

23) 「農民階級がそうした自給自足の小生産者の」→「それが小さな独立な個別生産者たちの存在を許すかぎりでは、農民階級がその」

24) 「#」という記号でページの下部に書かれている以下の部分は、前後のパラグラフが繋がりにから見て、「特徴的な形態」という語についてのちに書き加えられたものであることが分かるので、本稿では原注の扱いをしておく。MEGA では、本文に組み込んだうえで、異文目録に次のように記載している。——「この一節は、#)という記号をつけてページの末尾に書かれている。テキスト(647ページ14行)にも「特徴的な形態#」という記号があるので、これに合わせて、この箇所に挿入しておく。」

【原注】²⁴⁾ # 私は特徴的な形態と言う。同じこれらの形態は①資本主義的²⁵⁾生産様式の土台の上でも再現するが、しかし²⁶⁾この生産様式の性格を規定することはなくなっている。これはここでは利子生み資本の「特徴的な」形態ではないのである。【原注# 終り】

①〔異文〕「資本主義的」←「近代的」

どちらも、つまり高利による富裕な土地所有者の破滅も小生産者たちの搾取も、ともに大きな貨幣資本の形成と²⁷⁾集中とに通じる。しかし、どの程度までこうした過程が²⁸⁾(近代ヨーロッパでの結果がそうであったように)古い生産様式を廃止するののかということは、またそれが²⁹⁾資本主義的生産様式を³⁰⁾つくりだすかどうかということは、まったく、歴史的な発展段階に、またそれとともに与えられる諸事情にかかっている。|

|③94 | ³¹⁾利子を生む資本の特徴的な形態としての高利資本は、小生産の優勢に、すなわち自営の農民³²⁾などの優勢に、対応する。発展した資本主義的生産様式のもとでのように労働条件や労働生産物が資本として労働者に^{あいたい}相対している場合には、生産者としては労働者は貨幣を³³⁾借りる必要はない。彼が貨幣を³⁴⁾借りる場合には、それはたとえば質屋で個人的な必

25) 「生産様式」→「生産」

26) この生産様式の性格を規定することはなくなっている。これはここでは利子生み資本の「特徴的な」形態ではないのである。」→「たんに従属的な形態としてである。それらはここではもはや利子生み資本の性格を規定する形態ではないのである。」

27) 「集中」—— Concentrirung → Konzentration

28) 「(近代ヨーロッパでの結果がそうであったように)」→「近代ヨーロッパでそうであったように」

29) 挿入——「古い生産様式のかわりに」

30) 「つくりだす [herstellen]」→「出現させる [setzen]」

31) 「利子を生む資本 [d. Zins tragende Capital]」→「利子生み資本 [das zinstragende Kapital]」

32) 「など」→「や小手工業親方」

33) 「借りる」—— leihen → borgen

34) 「借りる」—— leihen → borgen

要のために行なわれる。これに反して、³⁵⁾彼が自分の労働諸条件[648]や自分の生産物の³⁶⁾所有者(現実のまたは名目上の)である場合には、彼は生産者として、自分に高利資本として^{あいたい}相対する³⁷⁾利子生み資本(貨幣貸付業者)と関係をもつのである。ニューマン³⁸⁾教授が、②高利貸が憎まれ軽蔑されていたのに銀行業者が尊敬されているのは、前者は富者に貸し後者は貧者に貸すからだ、と言っているのは、このことのまずい表現である³⁹⁾。1) 彼が見落としているのは、ここには二つの社会的生産様式の相違、またそれらのそれぞれに対応する社会的秩序の相違が介在しているのであって、事柄は貧富の対立で片づけられるものではないということである。むしろ、貧しい⁴⁰⁾生産者を⁴¹⁾相手に活動するその同じ高利⁴²⁾に、富裕な大土地所有者⁴³⁾から搾取する高利⁴⁴⁾が対応しているのである。ローマの貴族⁴⁵⁾がローマの平民⁴⁶⁾——小農民——をすっかり破滅させてしまったとき、この搾取形態は終りを告げたのであって、そのとき純粋な奴隷経済が小農民経済にとつて代わった。2)

①〔異文〕「394」←「386」

②〔異文〕「高利貸が憎まれ軽蔑されていたのに銀行業者が尊敬されているのは、」←「銀行業者が尊敬されていて高利貸が憎まれ軽蔑されているのは、」

35) 「彼」→「労働者」

36) 「所有者(現実の〔real〕または名目上の)」→「現実的な〔wirklich〕または名目上の所有者」

37) 「利子生み資本(貨幣貸付業者〔moneylender〕)」→「貨幣貸付業者〔Geldverleiher〕の資本」

38) 「教授」——削除。

39) 挿入——「(F. W. ニューマン『経済学講義』, ロンドン, 1851年, 44ページ)」

40) 挿入——「小」

41) 「相手に活動する」→「吸い尽くす」

42) 「に」→「が」

43) 「から搾取する」→「を吸い尽くす」

44) 「が対応しているのである」→「と手をつないで行くのである」

45) 挿入——「の高利」

46) 「——小農民——」→「つまり小農民」

【原注】⁴⁷⁾ ①銀行業者は、「富者に貸すが貧者にはほとんどあるいはまったく貸さない点で昔の高利貸とは違っている。……だから、銀行業者が貸すさいのリスクはそれだけ少ないのであり、彼にはそれだけ安い利率で貸す余裕があるのであって、この二つの理由から、彼は高利貸に付き物の世間の悪評から逃れるのである。」(W. ニューマン『経済学講義』, ロンドン, 1851年, 44ページ)。【原注1)終り】

①〔注解〕ニューマンからのこの引用は、カール・マルクス『経済学批判<1861-1863年草稿>』, MEGA, 第2部第3巻第4分冊, 1537ページ10-15行から取られている。

【原注2) Th. モムゼン『ローマ史』, 第1巻, 第2版, 1856年, 832ページ, 参照⁴⁸⁾。【原注2)終り】

ここでは、利子という形態で、生産者の⁴⁹⁾労賃 {かつかつの生計手段} を超えるすべての超過分 (後には利潤や地代として現われるもの) が高利貸によって呑みこまれてしまうこともありうる。それだから、国家の手にはいるものを除いてすべての剰余価値を利子を取りこむという場合の⁵⁰⁾利子の高さを、利子が⁵¹⁾(少なくとも通常は) この剰余価値の①ただ一部分をなしているだけだという場合の⁵²⁾利子率の高さと比較するのは、まったくばかげたことなのである。このような比較にさいしては、賃労働者は自分を使用する資本家のために利潤も利子も地代も、要するに全剰余価値を

47) エンゲルス版ではこの原注は削除されている。

48) エンゲルス版ではこの原注は削除されている。

49) 「労賃 {かつかつの生計手段}」→「かつかつの生計手段 (後の労賃に相当する額)」

50) 挿入——「この」

51) 「(少なくとも通常は {normaliter})」→「, 少なくとも正常な利子は,」

52) 挿入——「近代の」

生産して⁵³⁾引き渡さなければならないのだということが忘れられる⁵⁴⁾。
 {③ケアリはこのばかげた比較を行ない、それによって、資本の発展と④それに伴う利子率の低下とが労働者にとってどんなに有利であることを示そうとしている。} さらに、高利貸は自分の犠牲者の剰余労働を搾取するだけでは満足しないで、その犠牲者の労働条件そのもの、土地や家屋などの所有権を次々に自分のものにして行き、⁵⁵⁾こうしてたえず犠牲者から収奪することに没頭しているというのに、⁵⁶⁾労働者からの労働諸条件の完全な収奪が、資本主義的生産様式が⁵⁷⁾目ざす結果ではなく、この生産様式の出发点となる既成の前提だ、ということがまたもや忘れられるのである。賃金奴隷は、⁵⁸⁾(⁵⁹⁾奴隷と⁶⁰⁾まったく同様に)債務奴隷になるということからは⁶¹⁾排除されている。⁶²⁾(少なくとも生産者としての彼の資格においてはそうである。彼が債務奴隷になることがありうるのは、ただ消費者としての資格においてのみである。)この形態では実際に高利資本は生産様式を変えることなしに直接生産者のすべての剰余労働をわがものにするのであり、またこの形態では⁶³⁾生産者による労働諸条件の所有(または占
 [649] 有)——そしてそれに対応する⁶⁴⁾個別化された生産——が⁶⁵⁾内在的な規定なのであり (⁶⁶⁾ここでは資本は労働を直接には⁶⁷⁾自己のもとに包摂

53) 「引き渡さなければならない」→「引き渡す」

54) 「{ } および後出の「{ }」——削除。

55) 挿入——「これにたいしても、このように」

56) 挿入——「彼の」

57) 「目ざす」—— *zugehen* → *zustreben*

58) 「() および後出の「()」——削除。

59) 挿入——「ほんとうの」

60) 「まったく」——削除。

61) 挿入——「彼の地位によって」

62) 「() および後出の「()」——削除。

63) 「() および後出の「()」——削除。

64) 挿入——「小」

65) 「内在的な規定」→「本質的な前提」

66) 挿入——「したがって」

67) 「自己のもとに包摂せず」→「自分に従属させず」

せず、したがってまた産業資本として労働に対立せず)、この生産様式を窮乏させ、生産力を発展させないで麻痺させ、同時にこのような悲惨な状態を永久化するのであって、このような状態にあっては、資本主義的生産の場合とはちがって、労働の⑧社会的生産性が⁶⁸⁾労働者そのものの犠牲において発展させられることはないのである。

①〔異文〕「ただ……だけだ」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕「引き渡す」←「与える」

③〔注解〕「ケアリはこのばかげた比較をやって、それによって、資本の発展とそれに伴う利子率の低下とが労働者にとってどんなに有利であるかを示そうとしている。」——この命題はケアリのすべての著作を貫いている。マルクスはここで、その内容を簡潔に要約し、自分の言葉で再現しているのである。——チャールズ・ケアリ『賃金率試論……』、フィラデルフィア、ロンドン、1835年、112—113ページを見よ。——ヘンリ・チャールズ・ケアリ『フランス、グレイト・ブリテン、および合衆国の信用システム』、ロンドン、フィラデルフィア、1838年、2ページおよび9ページを見よ。

④〔異文〕「それに伴う」←「それによって伴われた」

⑤〔異文〕「こうして」——あとから書き加えられている⁶⁹⁾。

⑥〔異文〕「生産者による」——あとから書き加えられている。

⑦〔異文〕「個別化された〔*vereinzelt*〕」←「孤立した〔*isolirt*〕」

⑧〔異文〕「社会的」——あとから書き加えられている。

⑩⁷⁰⁾高利は、一方では、⁷¹⁾封建的（および古代的）富および所有の破壊者として〔作用する〕。他方では、それは、⁷²⁾小ブルジョア的、小農民的

68) 「労働者」→「労働」

69) MEGA では、「ihn |so:| zu」とあるべきところが「ihn | so:| so」と誤記されている。

70) 挿入——「このように」

71) 「封建的（および古代的）富および所有の破壊者として〔作用する〕」→「古代のおよび封建的富にたいしても古代のおよび封建的所有にたいしても転覆的破壊的に作用する」

生産の、要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現われているようなすべての形態⁷³⁾の破壊者として〔作用する〕。⁷⁴⁾

①〔注解〕以下五つのパラグラフ〔本稿181ページ8行まで〕は、カール・マルクス『経済学批判〈1861—1863年草稿〉』, MEGA, 第2部第3巻第4分冊, 1528ページ24行~1531ページ40行から〔かなりの手を加えて〕取られている。

|③95|⁷⁵⁾資本主義的生産様式のもとでは、労働者は生産条件すなわち自分が耕す土地や自分が加工する原料などの⁷⁶⁾非所有者である。しかしここでは、このような、⁷⁷⁾生産諸条件の疎外には、生産様式そのものの⁷⁸⁾実体的な変化が対応している。⁷⁹⁾用具は機械となり、労働者は作業場総員〔Atelier〕として労働する、等々。生産様式そのものが、もはや、このような小所有と結びついた生産用具の分散も許さないし、労働者たち自身の孤立も許さない。資本主義的生産では高利はもはや生産諸条件を生産者から分離することはできない。なぜならば、それらはすでに分離されているのだからである。

①〔異文〕「395」←「387」

高利は生産手段が分散されているところで貨幣財産を集中する。高利は

72) 「小ブルジョア的、小農民的生産の」→「小農民的で小ブルジョア的な生産を」

73) 「の破壊者として〔作用する〕」→「を、転覆し破滅させる」

74) エンゲルス版ではここで改行されていない。

75) 挿入——「発達した」

76) 「非所有者〔Nicht-Eigentümer〕である」→「所有者ではない」

77) 挿入——「生産者からの」

78) 「実体的な変化〔real change〕」→「現実の変革〔eine wirkliche Umwälzung〕」

79) 「用具は機械となり、労働者は作業場として労働する、等々。」→「個々別々な労働者たちが大きな作業場に集められて、分業化され互いに補足し合う活動をする。道具は機械になる。」

生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに⁸⁰⁾附着し、それを困窮させる。高利は生産様式を吸い尽くし、それを衰弱させ、そして、⁸¹⁾再生産がますますひどい諸条件のもとで行なわれるようにする。それだからこそ高利にたいする民衆の憎悪⁸²⁾が生じるのであり、古代世界ではますますもってそうなるのである。というのは、そこでは生産者が自分の生産諸条件の所有者であることが同時に政治的諸関係の基礎であり、⁸³⁾市民の自立性の基礎だったからである。

奴隷制が行なわれているかぎり、あるいはまた剰余生産物が封建領主やその家臣によって食いつぶされてしまうかぎり、そして⁸⁴⁾封建領主やその家臣が高利の手中に陥っているかぎり、生産様式はやはり同じままであり、ただそれが⁸⁵⁾いっそう苛酷になるだけである。債務を負った奴隷所有者や封建領主がますます多く吸い取るのは、彼自身がますます多く吸い取られるからである。あるいは、彼はついに高利貸に席を譲ってしまい、高利貸自身が土地所有者⁸⁶⁾等々になるのであって、ちょうど古代ローマの騎士⁸⁷⁾等々がそれである。昔の搾取者が行なう搾取は多かれ少なかれ⁸⁸⁾政治的権力手段だったが、この搾取者に代わって、⁸⁹⁾粗暴な、金銭をあさり回る成り金が現われる。しかし、生産様式そのものは変えられない。

資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、ただ①、高利が所有諸形態を破壊②し分解するからでしかない。つま

80) 「附着し」→「吸いつき」

81) 「再生産が……行なわれるようにする」→「再生産に……行なわれることを強制する」

82) 「が生じるのであり、古代世界ではますますもってそうなる」→「は古代世界で最も激しかった」

83) 「市民 [citoyen]」→「国家市民 [Staatsbürger]」

84) 「封建領主やその家臣が [diese]」→「奴隷所有者や封建領主が」

85) 挿入——「労働者にとって」

86) 「等々」→「や奴隷所有者」

87) 「等々」——削除。

88) 「政治的権力手段だった」→「家長的だった、というのはそれがだいたいにおいて政治的権力手段だったからである」

89) 「粗暴な、金銭をあさり回る成り金 [a coarse, money hunting parvenu]」→「冷酷な、金銭をむさばる成り上がり者 [ein harter, geldsüchtiger Emporkömmling]」

り政治的編制はこれらの [650] 所有形態の強固な基礎とそれらが同じ形態でたえず再生産されることとにもとづいているのである。アジア的な諸形態のもとでは、高利は、経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにもひき起こすことなしに長く存続することができる。資本主義的生産様式のそのほかの諸条件が存在するところで、またそれが存在するときに、はじめて、高利は、⁹⁰⁾新たな生産様式の形成手段の一つとして、封建領主や小生産の没落——資本としての労働諸条件の集中の手段〔——として〕現われるのである。

①〔異文〕ここに、「政治的に」と書いたのち、消している。

②〔異文〕「し分解」——あとから書き加えられている。

①②⁹¹⁾「中世にはどの国にも③一般的利子率というものはなかった。⁹²⁾はじめに〔高利を禁じる〕坊主たちの厳格さ〔があった〕。⁹³⁾貸付の保証のための司法的施設はあてにならなかった⁹⁴⁾。それだけに個々の場合の利子率は高かった。④貨幣流通がわずかで、たいていの支払を現金で行なうことが⁹⁵⁾必要であり、手形取引がまだ十分に発達していなかった。⁹⁶⁾利子を

90) 「新たな生産様式の形成手段の一つとして、封建領主や小生産の没落——資本としての労働諸条件の集中の手段〔——として〕」→「一方では封建領主や小生産の没落によって、他方では資本への労働諸条件の集中によって、新たな生産様式の形成手段の一つとして」

91) 「「」および後出の「」」——削除。

92) 「はじめに〔高利を禁じる〕坊主たちの厳格さ〔があった〕。」→「教会ははじめてからいっさいの利子取引を禁止していた。」

93) 「貸付の保証のための司法的施設はあてにならなかった。」→「法律も裁判も貸付を保証することはほとんどなかった。」

94) 「はじめに〔高利を禁じる〕坊主たちの厳格さ〔があった〕。貸付の保証のための司法的施設があてにならなかった。」——草稿の原文は次のとおりである。Erst die Pfaffenstrenge. Unsicherheit der gerichtlichen Anstalten zur Sicherung der Anleihen. MEGA はこれを次のようにしており、その結果、まるで意味の通らない文章になってしまっている。Erst die Pfaffen strenge Unsicherheit der gerichtlichen Anstalten zur Sicherung der Anleihen.

95) 「必要であり、手形取引がまだ十分に発達していなかった。」→「必要は、貨幣の借入を余儀なくさせた。そして、手形取引がまだ十分に発達していなければならないほど、ますますそうだった。」

どう見るかについても、高利の概念をどう見るかについても、大きな違いがあった。カール大帝の時代には、⁹⁷⁾100%取られれば高利と見なされた。ボーデン湖畔のリンダウでは^⑤1344年にその土地の市民たちが216 $\frac{2}{3}$ %を取った。チューリッヒでは市参事会が43 $\frac{1}{3}$ %を法定利子と定めた。イタリアでは、12—14世紀に普通の率は20%を越えなかったけれども、ときには40%を支払わなければならなかった。ヴェローナは12 $\frac{1}{2}$ %を法定利子と定めた。⁹⁸⁾フリードリヒ二世⁹⁹⁾が10%という命令を出したとき、この命令が適用されるのはユダヤ人だけであった。キリスト教徒にたいしては彼はなんにも言いたくなかったのである。ライン沿岸のドイツではすでに13世紀には10%が普通だった。」(ヒュルマン、『都市制度の歴史、云々』[『中世の都市制度』], 第2巻, 55-57ページ。)

①〔注解〕ヒュルマンからのこの引用は、カール・マルクス『経済学批判<1861-1863年草稿>』, MEGA, 第2部第3巻第4分冊, 1537ページ31行～1538ページ4行から取られている。

②〔注解〕この引用はヒュルマンの原文では次のようになっている。「中世にどの国でも一般的利子率が形成されることはできなかったのは、さまざまな事情が重なった結果であった。聴罪司祭が教会法を厳しく重んじれば重んじるだけ、また、貸付の保証のための司法的施設が不足していればいるだけ、つまり債権者がさらされる危険が大きければ大きいほど、それだけ個々の場合の利子率が高くなった。これに加えて、貨幣流通はわずかだったし、手形取引がまだ十分に発達していなかったものでたいいの貨幣支払を現金で行なう必要があった。これらの事情次第で、利子をどう見るかについても、高利の概念をどう見るかについても、大きな違いが生じた。カール大帝の時代に

96) 「利子をどう見るかについても、高利の概念をどう見るかについても、」→「利子率についても、高利の概念についても、」

97) 「100%取られれば」→「だれかが100%を取れば」

98) 挿入——「皇帝」

99) 「が10%という命令を出したとき」→「は10%と定めたが」

は、利子率100%でようやく高利と見なされた。お上^{かみ}がなにもかかわらないときに利子率がどこまで上がることができたかは、1344年にボーデン湖畔のリングウでの一例から明らかとなる。その土地の市民たちは高利の利益を216²/₃%にまで高騰させた。……というのは、彼らは10シリング (=120ペニヒ) にたいして毎週5ペニヒ、つまり年について260ペニヒを取っていたのだからである。だから、あるユダヤ人の両替商が住み着き、かなりわずかの利子で満足して、高利を取っていたキリスト教徒たちを赤面させたとき、市民たちは喜んだ。市がこれよりもいい世話をやいたのは隣接するチューリッヒである。ここでは市参事会が、リングウの高利貸たちの利子額の5分の1、すなわち43¹/₃%を、つまりたとえば10シリング (=120ペニヒ) にたいして週に1ペニヒを、法定利子率として規定していた。もちろんそれでもかなりの高利である。しかし、はるかに多量の貨幣流通があったイタリアでさえも、12世紀から14世紀にかけて普通の利子率は20%を超えなかったけれども、そこそこで、またときには、40%までが支払われなければならなかった。その数とその自己意識とによって強い力を持ち、商業的利益に駆り立てられていた、この国の富裕な市民層は、大胆に教会権力の諸制限を破った。それらのうちのいくつかが法定利子率を、とりわけヴェロナが12¹/₂%を命じたとき、彼らはそれによって、自分たちが良心の迷いを無視することを知らしめたのであった。これにたいして、フリードリッヒ二世が、10% (10ウンキアにたいして年について1ウンキア) を超えて取ってはならない、という命令を出したとき、この命令が適用されるのはユダヤ人だけであった。キリスト教徒にたいしては彼はなにも言いたくなかったのである。まさにこの利子率がライン沿岸のドイツですでに13世紀に普通の利子率であったことは、……」¹⁰⁰⁾

③〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

④〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

⑤〔訂正〕「1344」←「1348」

①¹⁰¹⁾資本の生産様式のない資本の搾取。この関係は、ブルジョア経済のなかでも、遅れた産業部門や近代的生産様式への移行に逆らう産業部門で再現する。たとえば、イギリスの利率をインドの利率と比較しようとするならば、その場合にはイングランド銀行の利率をとるべきではなく、たとえば¹⁰²⁾フレーム〔枠付きの機械〕の貸し手等々の利率をとらなければならない¹⁰³⁾(下に挙げる例を見よ)②1)。

①〔注解〕以下の二つの文¹⁰⁴⁾は、カール・マルクス『経済学批判〈1861-1863年草稿〉』, MEGA, 第2部第3巻第5分冊, 1546ページ14-15行, 5-8行から取られている。

②〔異文〕「1)」——マルクスは、あとで書くつもりでいたこの注を書かなかった。

【原注】1) 【原注1)終り】

高利は、消費的な富に比べれば、それ自身資本の成立過程として歴史的に重要である。¹⁰⁵⁾(商人財産ともども)土地所有に依存しない貨幣財産の形成。¹⁰⁶⁾ |

100) MEGA ではこの引用に、原典の脚注に対応する注番号157—163が挿入されている。MEGA がなぜこれらの注番号をつけたのか、まったく理解できない。脚注そのものは引用に含まれていないので、これらの注番号はなんの意味も持たないだけでなく、紛らわしいので、本稿では省く。

101) 「資本の生産様式のない資本の搾取。」→「高利資本は、資本の生産様式をもつことなしに資本の搾取様式をもっている。」

102) 「フレーム〔枠付きの機械〕の貸し手等々」→「家内工業の小生産者に小さな機械を貸す人」

103) 「(下に挙げる例を見よ)」——削除。この「下に挙げる例」は、マルクスが、ページの下半部に1)という注番号を書いて、あとで書くつもりでいた注に書かれるはずであったのであろう。しかしこの注は書かれないままに残された。

104) MEGA では、「650ページ23-26行」とあるべき当該箇所の指示が「650ページ14-30行」と誤記されている。

105) 「(商人財産ともども)土地所有に依存しない貨幣財産の形成。」→「高利資本と商人財産とは、土地所有に依存しない貨幣財産の形成を媒介する。」

① | ②396 | 生産物の商品としての性格が発展していなければならないほど、交換価値が生産をその十分な広さと深さにおいて征服していなければならないほど、それだけますます貨幣は、使用価値での富の局限された表現様式に対立して、本来の富¹⁰⁷⁾として、一般的な富として、現われる。このことに貨幣蓄蔵はもとづいている。世界貨幣および蓄蔵貨幣としての貨幣を別とすれば、とくに支払手段の形態こそは、貨幣が商品の絶対的な形態として現われるものである。また、651とくに支払手段としての貨幣の機能こそは、利子を、したがってまた貨幣資本を発展させるものである。浪費をこととし退廃をひき起こす富が欲するものは、¹⁰⁸⁾貨幣としての、一般的購買力〔general power of purchasing〕としての貨幣である。(また債務支払のための〔貨幣もそうである〕。)小生産者が貨幣を必要とするのは、なによりもまず支払のためである。¹⁰⁹⁾{この場合にはもろもろの租税もまた役割を演じる。} どちらの場合にも貨幣は貨幣として必要とされるのである。他方、貨幣蓄蔵は高利においてはじめて実在的となり、その夢を実現する。¹¹⁰⁾彼が望むものは、資本ではなく、貨幣としての貨幣である。¹¹¹⁾そして、利子によって彼はこの蓄蔵貨幣をそのまま資本に転化させる。——すなわち、剰余労働の¹¹²⁾全部または一部分をわがものにするための、そして¹¹³⁾生産条件そのものの一部分を、たとえそれが名目的には相変わらず他人の所有として彼に対立しようとも、わがものにするための、手段に転化させる。見たところ高利は、¹¹⁴⁾③エピクロスの体系のなかの神々と同様に、生産の気孔のなかにとどまっている。商品形

106) エンゲルス版ではここで改行されていない。

107) 挿入——「そのもの」

108) 「貨幣としての、一般的購買力〔general power of purchasing〕としての貨幣」→「貨幣としての貨幣、なんでも買える手段としての貨幣」

109) 「{この場合にはもろもろの租税も役割を演じる。}」→「(領主や国家への夫役や現物納付が貨幣地代や貨幣租税に転化することはこの点で大きな役割を演じる。)」

110) 「彼」→「蓄蔵貨幣所有者」

111) 「そして」→「しかし」

112) 「全部または一部分」→「一部分または全部」

113) 挿入——「また」

態が生産物の一般的な形態¹¹⁵⁾でないことが多ければ多いほど、貨幣を手に入れることはますます困難である。¹¹⁶⁾高利貸は貨幣を必要とする人々の支払能力または抵抗能力のほかにはまったくなんの¹¹⁷⁾限度も知らない。¹¹⁸⁾

①〔注解〕このパラグラフの大部分¹¹⁹⁾〔本稿前ページ下から11行まで〕は、カール・マルクス『経済学批判〈1861-1863年草稿〉』, MEGA, 第2部第3巻第5分冊, 1547ページ29行～1548ページ7行から取られている。

②〔異文〕「396」←「388」

③〔注解〕「エピクロスの体系のなかの神々」——〔MEGA〕403ページ8行への注解をみよ。〔403ページ8行への注解は次のとおり。——「ギリシアの唯物論的哲学者エピクロスの見解によれば、神々が住んでいるのは、並んで存在する数多くの世界のあいだにある間隙〔Intermundien〕, すなわち中間の空間であって、神々は世界の発展にも人間の生活にもいかなる影響も及ぼさないのである。〕」

①貨幣が¹²⁰⁾(小農民的産業や小市民的産業で) 購買手段として必要とされるのは、おもに、生産諸条件が労働者の手から¹²¹⁾{これらの生産様式では労働者は¹²²⁾まだ生産諸条件の所有者である} 災害や異常な震撼のため

114) 「エピクロスの体系のなかの神々と同様に、生産の気孔のなかにとどまっている。」→「エピクロスの場合の神々が世界と世界とのあいだの間隙に住んでいるように、生産の気孔のなかに住んでいる。」

115) 「でないことが多ければ多いほど」→「であることが少なければ少ないほど」

116) 挿入——「それだからこそ」

117) 「限度〔Maaß〕」→「制限〔Schranke〕」

118) エンゲルス版ではここで改行されていない。

119) MEGA では、「650ページ34行～651ページ13行」とあるべき当該箇所の指示が「650ページ35行～651ページ13行」となっている。

120) 「(小農民的産業や小市民的産業で)」→「小市民的生産や小農民的生産で」

121) 「{ } および後出の { }」→「() および { }」

122) 挿入——「大部分」

に失われてしまうか、または少なくとも再生産の普通の経過では補填されない場合である。生活手段や¹²³⁾原料¹²⁴⁾等々はこのような生産諸条件の¹²⁵⁾なかにはいるべきものである。これらのものの騰貴が、生産物の売上金からこれらのものを補填することを、¹²⁶⁾また、不作のときに農民がそれらを現物で補填することを、不可能にすることがありうる。¹²⁷⁾いくつかの例。——戦争によつてローマの貴族は平民を破滅させ、彼らに軍務を強制し、軍務は彼らの労働条件の再生産を妨げ、したがって彼らを貧困化した¹²⁸⁾{¹²⁹⁾そしてここではこのことが優勢な形態である。すなわち貧困化とは再生産諸条件の萎縮または喪失なのである}のであるが、この同じ戦争が貴族のために分捕品の銅すなわち②当時の貨幣で倉庫や地下室を一杯にした。貴族は平民に穀物や馬¹³⁰⁾などの¹³¹⁾商品を直接には渡さないで、この¹³²⁾不用な銅を平民に貸し付け、この状態を法外な高利¹³³⁾に利用した。¹³⁴⁾{こうして平民を¹³⁵⁾、捕虜等々を、自分の債務奴隷にした。} カール大帝の治下では、¹³⁶⁾彼が同じようにしてドイツの農民を没落させたので、彼らは債務者から農奴になるよりほかはなかった。周知のよう

123) 「原料」—— Rohmaterial → Rohstoff

124) 「等々」—— 削除。

125) 「なかにはいるべきものである」→「主要な部分をなしている」

126) 「また、不作のときに農民がそれらを現物で補填することを、」→「ただの不作でも農民が自分の種子用穀物を現物で補填することを妨げることがありうるように、」

127) 「いくつかの例。」—— 削除。

128) 「{ } および後出の「 } 」→「() および「) 」」

129) 「そしてここではこのことが優勢な形態である。すなわち貧困化とは再生産諸条件の萎縮または喪失なのである」→「そして貧困化、再生産諸条件の萎縮または喪失がここでは優勢な形態である」

130) 挿入——「や有角家畜」

131) 挿入——「必要な」

132) 挿入——「自分自身には」

133) 挿入——「を搾り取ること」

134) 「{ } および後出の「 } 」—— 削除。

135) 「、捕虜等々を、」—— 削除。

136) 「彼が同じようにしてドイツの農民を没落させた」→「フランクの農民がやはり戦争によって没落させられた」

137) 「たとえばローマの諸国等々では、」→「ローマ帝国では、しばしば」

に、¹³⁷⁾たとえばローマの諸国等々では、飢饉が、¹³⁸⁾自分自身を奴隷として富者に売り渡すことを引き起こした。以上は一般的な¹³⁹⁾「転回点」について述べたものである。個々に見れば、¹⁴⁰⁾生産者にとっての生産諸条件の維持または喪失は無数の偶然事にかかっており、また、このような偶然または喪失¹⁴¹⁾——貧困化——のそれぞれが高利寄生者が付着できる点になる。¹⁴²⁾一小農民にとっては、ただ一頭の牛が倒れただけでも、彼の再生 652 産をこれまでの規模で再開することができなくなるのに十分である。¹⁴³⁾ここに高利が入り込むのである。

①〔注解〕このパラグラフと次のパラグラフ〔本稿次ページ3行まで〕は、カール・マルクス『経済学批判〈1861—1863年草稿〉』、MEGA、第2部第3巻第5分冊、1552ページ14行～1553ページ23行から、〔大きく〕手を加えて取られている。

②〔異文〕「当時の〔Jener〕」——あとから書き加えられている。

¹⁴⁴⁾支払手段。これは高利の本来の大きな特有な地盤である。一定の期限に納入されるべき貨幣納付、すなわち借地料や¹⁴⁵⁾租税等々はみな貨幣支払の必要を伴っている。¹⁴⁶⁾(¹⁴⁷⁾概して高利は、古代ローマから近代に至るまで、¹⁴⁸⁾徴税請負人〔fermiers généraux, Steuerpächter〕につきもの

138) 「自分自身を」→「自由民が子供や自分自身を」

139) 「〔 〕および後出の「 〕」——削除。

140) 「生産者」→「小生産者」

141) 「——貧困化——のそれぞれが」→「のそれぞれが貧窮化を意味していて、」

142) 「一小農民〔ein kleiner Bauer〕」→「小農民〔der Kleinbauer〕」

143) 「ここに高利が入り込むのである。」→「そこで彼は高利のとりこになるのであり、一度そうなれば再び自由になることはけっしてできないのである。」

144) 「支払手段。これは」→「とはいえ、支払手段としての貨幣の機能は、」

145) 挿入——「年貢や」

146) 「〔 〕および後出の「 〕」——削除。

147) 挿入——「それだから、」

148) 「徴税請負人〔fermiers généraux, Steuerpächter〕」→「徴税請負人〔Steuerpächter, fermiers généraux, receveurs généraux〕」

である。)次いで、商業の発展¹⁴⁹⁾等々につれて、購買と支払との¹⁵⁰⁾分離が
発展する。貨幣は一定の期限に引き渡されなければならない。¹⁵¹⁾このこ
とが、今日では貨幣恐慌のときに自分の姿を現わすのである。¹⁵²⁾

¹⁵³⁾この同じ高利は、支払手段としての貨幣の必要を¹⁵⁴⁾発展させる主要
手段になる。なぜならば、高利は生産者をますます深く債務におとしいれ
るからであり、また、利子の重荷で彼の¹⁵⁵⁾生産を不十分にすることによ
って彼の日常の支払手段をなくさせてしまうからである。ここでは高利は
支払手段としての貨幣から成長して、貨幣のこの機能すなわち自分の最も
固有な地盤を拡張するのである。

[655] | ④¹⁵⁶⁾ | ②¹⁵⁷⁾高利も商業も与えられた¹⁵⁸⁾生産諸関係を搾取する
のであり、¹⁵⁹⁾それらをつくりだすのではなく、外から¹⁶⁰⁾それらに関わる
のである。高利は、絶えず繰り返しその生産様式を搾取できるようにする
ためにそれを直接に維持しようとするのであり、保守的であり、ただそれ
をいっそう悲惨にするだけである。¹⁶¹⁾生産諸条件が商品として¹⁶²⁾過程に
はいり商品としてそれから出てくることが少なければ少ないほど、

149) 「等々」→「や商品生産の一般化」

150) 挿入——「時間的」

151) 「このことが、今日では貨幣恐慌のときに自分の姿を現わすのである。」→「そのために今日でもまだ貨幣資本家と高利貸との区別がはっきりしないような状態になることがあるということとは、近代の貨幣恐慌によって証明されている。」

152) エンゲルス版ではここで改行されていない。

153) 挿入——「しかし、」

154) 「発展させる」→「いっそう十分に発展させる」

155) 「生産を不十分」→「規則的な再生産をさえ不可能」

156) 「400」——草稿に399ページは存在しない。欠番となっている。

157) エンゲルス版では、ここから草稿401ページの終りまでの箇所を、第36章の最後に——区
分線を引いたあとに——置いている。

158) 「生産諸関係」→「生産様式」

159) 「それら」→「それ」

160) 「それら」→「それ」

161) 「生産諸条件」→「生産要素」

162) 「過程」→「生産過程」

163) 「全生産が流通に立脚することが少なければ少ないほど」→「流通が社会的再生産のなか
で演ずる役割が重要でなければならないほど」

貨幣からそれらをつくりだすことはますます特別な行為として現われる。¹⁶³⁾全生産が流通に立脚することが少なければ少ないほど、それだけ¹⁶⁴⁾高利資本は栄えるのである。

①〔異文〕「400」←「389」

②〔注解〕以下の2パラグラフは、カール・マルクス『経済学批判。〈1861-1863年草稿〉』から取られている（MEGA，第2部第3巻第5分冊，1554ページ1-20行）。

貨幣財産が特別な財産として発展するということは、高利資本に関して言えば、高利資本はそのすべての請求権を貨幣請求権の形でもっているということを意味している。生産の主要部分〔Gros〕が現物給付などに、¹⁶⁵⁾使用価値に、限られていなければいるほど、ますますその[656]国では高利資本が発展するのである。

¹⁶⁶⁾¹⁶⁷⁾中世の利子¹⁶⁸⁾について。

②②「中世には人口は純粹に農業的だった。そして、そのようなところでは、封建的統治のもとでそうだったように、わずかばかりの交易しかありえず、したがって、またわずかばかりの利潤しかありえない。それだから、高利を取り締まる法律が中世には是認されていたのである。そのうえ、農業国では、貧窮つまり貧困による窮境におちいった場合のほかには、貨幣を借り入れる必要を感じることはめったにない。」③「ヘンリ八世は利子を10%に制限し、ジェームズ一世は8%に、チャールズ二世は6%に、アンは5%に制限した。」④「当時は貸付業者は、法律上の独占者

164) 「高利資本」→「高利」

165) 挿入——「つまり」

166) 「中世の利子」——エンゲルス版では、次の小見出しの前までの部分の小見出しとなっている。

167) エンゲルス版ではここに、この小見出しの次のパラグラフに続く1パラグラフ（本稿，192ページ5-9行）を置いている。

168) 「について」——削除。

ではなかったにしても、事実上の独占者だったのであり、だからまた、彼らにも他の独占者たちと同様に制限を加えることが必要だったのである。」
「今日では利潤率が利子率を規制している。当時は利子率が利潤率を規制した。貨幣貸付業者が商人に高い利子率を押しつければ、商人は自分の商品にもっと高い利潤率をつけ加えなければならなかった。したがって、多額の貨幣が、それを貨幣貸付業者のポケットに入れるために、買い手のポケットから取り上げられたのである。」(J. W. ギルバート『銀行業の歴史と原理』, ロンドン, 1834年, [163,] 164, 165ページ。)

- ①〔注解〕このパラグラフは、カール・マルクス『経済学批判。〈1861-1863年草稿〉』から取られている(MEGA, 第2部第3巻第5分冊, 1556ページ39行~1557ページ11行)。
- ②〔注解〕この引用は、ギルバートでは次のようになっている。——「中世には、貨幣貸付にたいして取られるいっさいの利子が不正で聖書に反するものと信じられ、貸手は高利貸の烙印を押された。……しかし、純粋に農業的な国では、また封建制度のような統治のもとでは、わずかばかりの交易しかありえず、したがってまたわずかばかりの利潤しかありえない。そのうえ、……」
- ③〔注解〕この引用は、ギルバートでは次のようになっている。——「ヘンリ八世の治下では利子は10%に制限されていた。ジェームズ一世はそれを8%に引き下げた。利子はこの率でチャールズ二世の治世まで維持されたが、ここでそれは6%に引き下げられ、そして最後に、アン女王の治下でそれは5%に引き下げられた。」
- ④〔注解〕以下の二つの引用は、ギルバートでは次のようになっている。「つまり彼らは、法的にはそうでなかったにしても、事実上は独占していたのであり、だからまた、彼らは他の独占者たちと同様に制限のもとに置かれることが必要だったのである。今日では利子率を規制しているのは利潤率である。当時は利潤率を規制したのが利子率であった。貨幣貸付業者が商人に高

い利率を押しつければ、商人は自分の商品にもっと高い利潤率をつけ加えなければならなかった。したがって、多額の貨幣が、それを貨幣貸付業者のポケットに入れるために、買い手のポケットから取り上げられていたのである。」

¹⁶⁹⁾¹⁷⁰⁾(高利が二つのことを実現するかぎり、すなわち、第1には一般に¹⁷¹⁾(商人身分と並んで) 独立な貨幣財産を形成するということを実現し、第2には労働諸条件をわがものにすること、すなわち古い労働諸条件の占有者を滅ぼすということを実現するかぎり、高利は産業資本のための諸前提を形成するための強力な¹⁷²⁾手段である。)

¹⁷³⁾高利についてのルター。

①②「聞くところでは、③今では年々ライブツィヒの市^{いち}では10グルデン、すなわち〔年3回の支払だから〕100について30も取られている。これにノイエンプルクの市^{いち}を¹⁷⁴⁾も加えて、100について40になるとする人もある。もっと¹⁷⁵⁾多いかどうか、私は知らない。なんということだ、いったいおしまいにはどうなるのだろうか？ いまライブツィヒで100フローリンもっている人は年に40フローリンも取っている。つまり1年間に農民か市民を一人食ってしまうわけである。もし1000フロリンもっていれば、年に400取ることになる。それは、一年間に騎士か富裕な貴人を一人食ってしまうことである。もし10,000もっていれば年に4000取ることになる。つまり1年間に富裕な伯爵を一人食ってしまうことになる。もし100,000も

169) エンゲルス版では、このパラグラフは、前出の小見出し「中世の利子」の直前に置かれている。

170) 「() および後出の「) 」 — 削除。

171) 「() および後出の「) 」 — 削除。

172) 「手段」→「槓杆」

173) 「高利についてのルター。」 — 削除。

174) 「も」 — 削除。

175) 「多い〔mer〕」 — エンゲルス版では、誤って nur となっている。MEW 版もこれを引き継いでいる。

ってれば、大商人ならばこのくらいはもっているにちがいないが、年に40,000取ることになる。つまり1年間に富裕な大公を一人食ってしまうことになる。もし1,000,000もってれば年に400,000取ることになる。つまり1年間に大王を一人食ってしまうことになる。しかも、身体にも商品にもどんな危険を受けることもなく、なんの労もとらないで、ただ炉のそばに座ってりんごを焼いている。つまり、盗人が家に座っていて10年のうちに全世界を食ってしまうようなものであろう。」(『1524年の商取引と高利とについてのルター』、『Th. ルター著作集』、ウィッテンベルク、1589年、第6部¹⁷⁶⁾。[312, 313ページ])

- ①〔注解〕マルクスは、ルターからの以下の抜粋を行なうさい、必ずしもルターの書記法に従わず、高地ドイツ語の正書法も使っている。
- ②〔注解〕この引用は、『経済学批判〈1861-1863年草稿〉』から取られている(MEGA, 第2部第3巻第4分冊, 1527ページ15-29行)。
- ③〔注解〕「今では年々ライブツィヒの市では10グルデン、すなわち〔年3回の支払だから〕100について30も取られている。」——ここで言われているのは、利子を3回の分割でライブツィヒの市で支払うという条件での100グルデンの貸付である。以前、ライブツィヒでは年々、3回の市が開催された。すなわち、新年の市、復活祭の市および聖ミカエル大天使の日の市である。

[657]①「15年前に私は高利に反対して書いたが、そのときすでに高利はもはやどんな改善も望めないほどひどくはびこっていた。それ以来高利は非常に思い上がって、¹⁷⁷⁾いまではもはや悪徳や罪業や恥辱とされること

176) エンゲルス版(1894年版)ではこの出典は、『牧師諸氏へ、高利に反対して説く』、ウィッテンベルク、1540年、と訂正されている。MEW版では、「1840年の『牧師諸氏へ、高利に反対して』、『ルター著作集』、ウィッテンベルク、1589年、第6部。[312ページ]」としたうえで、ここに編集者の注をつけ、「初版では、1524年の『商取引と高利とについての諸書』、となっている」と注記している。MEW版でのこの注での「初版では」というのは、明らかに、「マルクスの草稿では」の誤りである。

には甘んじないで、あたかも人々に大きな愛とキリスト教的奉仕とを与えるものでもあるかのように、純粋な徳行であり名誉であると自賛するようになった。恥辱が名誉となり、悪徳が徳行となったのでは、¹⁷⁸⁾いったいどうすればよいのか？ セネカは自然的理性から次のように述べている。悪徳とみなされてきたことが慣習になっているところでは、救治手段は存在しない〔Deest ¹⁷⁹⁾remedii locus, ubi, quae vitia fuerunt, mores fiunt.〕, と。〕(『牧師諸氏へ、高利に反対して説く、云々』, ヴィッテンベルク, 1540年。)^{②180)}「そこで高利閣下は次のようにのたまう。友よ、いまは余裕があるので、100を5とか6とか10とかで貸すことで、私は隣人に大きな奉仕をする。そこで隣人は私に、そのような貸付を特別な慈善だとして感謝することになる。隣人はきっと私に¹⁸¹⁾貸付を懇請し、強制されてではなく自分の方から、100について5とか6とか10グルデンとかを私に贈ろうと申し出るのだ。私が暴利をむさぼることなく後ろめたい思いなしにそれを受け取ってはならないと言うのだろうか？……誇るもよし、飾るもよし、めかすもよい。……だが、より多くのものやより良いものを取るのは高利であり、そうする者は彼の隣人にたいして、奉仕をするのではなく害をするのであって、盗んだり奪ったりしてそうするのと同じである。奉仕だとか慈善だとか言われるもののすべてが彼の隣人にとって奉仕や慈善であるわけではない。というのも、姦通する男女といえども互いに大きな奉仕と満足を与え合うのだからである。馬夫は放火殺人者に、この者が路上で盗奪をし国土と国民とを攻撃するのを助けるという大きな馬夫奉仕をする。教皇派の連中はわれわれの仲間のために大いに奉仕をする。その奉仕

177) 「いまでは〔nun〕」——エンゲルス版では(MEW版でも)、nieとなっている。

178) 「いったいどうすればよいのか〔Was will nun helfen u. raten〕」——エンゲルス版では(MEW版でも)、Was will nun helfen rathenとなっている。

179) 「remedii」——草稿では remediis と誤記されており、MEGA でもそのままになっている。

180) ここから草稿400ページの終りまで——削除。

181) 「貸付を」——ルターの原文では「貸付を〔darum〕」であるが、マルクスの草稿では「三拝して〔dreimal〕」となっている。

とは、すべての人々を溺れさせたり焼いたり殺したり獄中で朽ちさせるのではなく、いくらかは生かしておいて、彼らを追い払い、または彼らの持ち物を取り上げるだけだ、というものである。悪魔でさえ彼の召使たちのためには大きな計り知れない役立ちをする。……要するに、世界は大きな、りっぱな、日々の奉仕や善行に満ちているのである。……詩人たちがキュクロプス〔一つ目の巨人族〕の一人ポリュペモスについて書いているところでは、彼はオデュッセウスに親切を尽くしたいと約束したが、その親切とは、まずもってオデュッセウスの仲間たちを食うことにし、オデュッセウスを食うのはそのあと最後にしよう、というものであった。じつに、これまた一つの奉仕であり、りっぱな善行だったのである。このような奉仕や善行がはびこって、いまでは高貴な人も高貴でない人も、農民も市民もその修行をし、……そのあとで口をぬぐってこう言うのである。そうだ、もっていなければならないものはもたなければならないのだ、私はそれを手許にとっておくことができるし、またそうしておきたいけれども、私はそれを人々のために役立てるのだ。……人の子らは敬虔になったのであって、……だからいまではもはや、だれ一人として高利を取ることも欲張ることも悪意をもつこともありえないのだ。世間はひたすら敬虔になったのであり、各人は互いに役立ち合っているのであって、だれ一人として他人に損害を与えてはいないのだ。……だが、貧しくて必要に迫られている人がそのような奉仕を必要としており、おそらくは、自分がすっかり食われてしまわないことを奉仕または善行だと考えざるをえないにせよ、彼が行う奉仕がそうしたものである以上、彼はそのような奉仕をいまわしい悪魔のために行っているのである。」(同前。)

①〔注解〕この引用は、カール・マルクス『経済学批判〈1861-1863年草稿〉』から取られている(MEGA, 第2部第3巻第4分冊, 1532ページ19-26行)。——この引用における強調はマルクスによるものである。

②〔注解〕この引用とその次の引用¹⁸²⁾は、カール・マルクス『経済学批判

〈1861-1863年草稿〉』から取られている（MEGA，第2部第3巻第4分冊，1533ページ1-33行，および，1536ページ6-17行）。——この二つの引用における強調はすべてマルクスによるものである。

「だから、この地上には、悪魔に次いで、658 守銭奴の高利貸にまさる人類の敵はない。というのも、彼は万人の上に神として臨もうとしているからである。トルコ人や武人や暴君も悪人ではあるが、彼らは人民を生かしておかなければならないし、自分たちが悪人であり敵であるということを認めなければならない。しかも、ときには幾らかの人々を憐れむこともあろうし、また、じっさい憐れむにちがいない。ところが、高利貸の欲張りどもはどうかと言えば、彼は、全世界をできるだけ飢えと渇きと苦しみとに陥れていっさいを自分ひとりの手に収めようとし、そして、各人が一つの神としての彼から受け取って永久に彼の奴僕になるようにしようとする。そこで彼は胸をおどらせ、それは彼をさらに元気づける。同時に、テン革襟の上着、金びかの鎖や指輪や衣服を身につけ、口をぬぐい、自分を高貴な信心深い人に見せかけて賞賛されようとする。……^①敬虔な高利貸。……じっさい彼の暮らしぶり、週に2回断食し、他の人々と同じではなかった、あのパリサイ人のそれのようにつましいものである。」（同前、および、『富者と貧者ラザロについての福音書にたいする説教』、ヴィッテンベルク、1555年。）|

①〔異文〕「敬虔な高利貸。……」——あとから書き加えられている。

|①401|②「ユダヤ人、金貸、高利貸、暴利取立人、これがわれわれの最初の銀行業者であり、われわれの初期の金融業者だったのであって、彼らの性格はほとんど破廉恥と呼んでもよいものだった。……それから次にロ

182) MEGA の注解は、この次の引用の最後の文をここでの指示のなかから除いているが、この文も、MEGA の同じ分冊の1527ページ36-38行に引用されている。

ンドンの金匠がこの仲間に加わった。だいたいにおいて……われわれの初期の銀行業者たちは……非常に悪い仲間だった。彼らは貪欲な高利貸で冷酷な暴利取立人だった。」(ハードカースル『銀行と銀行業者』, 第2版, ロンドン, 1843年, 19, 20ページ。)

①〔異文〕「401」←「390」

②〔注解〕次の引用は、ハードカースルでは次のようになっている。——「ユダヤ人、金貸、高利貸、暴利取立人、これがわれわれの初期の金融業者だったのであって、交易をいたるところで不快で過酷なものにしたが、また他方では、彼らはほとんど破廉恥と呼んでもよいような性格を自分で——いくらかは手間をかけて——手に入れたのであった。最も早い時期からこの仕事の主要な取り分を強奪していた外国人たちの仲間に次第に加わっていったのはロンドンの金匠だった。……」

¹⁸³⁾イタリアの諸都市でのように、商業が——とくに海外貿易が——発展しているところでは、早期に信用制度〔が発展した〕。オランダではそうだった。信用制度はどこでも、海外貿易および海外市場の発展に比例して発展したと言いうる。この場合には、利子は利潤によって規制される。(ヴェネツィア、ゲヌア^①、バルセロナ等々、のちにはオランダでの諸銀行の設立は度外視して。) ¹⁸⁴⁾「ヴェネツィアによって与えられた実例¹⁸⁵⁾はこうして急速に模倣された。すべての沿海都市が、また一般に、その独立とその商業とによって名をなしていたすべての都市が、その最初の銀行を

183) 「イタリアの諸都市でのように、商業が——とくに海外貿易が——発展しているところでは、早期に信用制度〔が発達した〕。オランダではそうだった。信用制度はどこでも、海外貿易および海外市場の発達に比例して発達したと言いうる。この場合には、利子は利潤によって規制される。(ヴェネツィア、ゲヌア、バルセロナ等々、のちにはオランダでの諸銀行の設立は度外視して。)」——削除。

184) 以下のオジェからの引用には、そのほぼ全体にわたって左の欄外にインクで線が引かれている。

185) 挿入——「 」（銀行設立の）「 」

設立した。これらの都市の船が帰ってくるまでには長く待たされることが多かったので、不可避免的に信用授与の習慣が生まれ、アメリカの発見とそれに伴う対アメリカ貿易はこの習慣をいっそう強固にした。〔 〕 {これは一つの主要点である。} 〔 〕 積み荷には②多額の前貸が必要とされたが、これはすでにかつてアテネやギリシアで見られたことである。③1308年にはハンザ都市ブリュージュは一つの保険施設をもっていた。」(M. オジエ, 同前 [『公信用について』, パリ, 1842年], 202, 203ページ。)

①〔異文〕「, バルセロナ」——あとから書き加えられている。

②〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

③〔訂正〕「1308」←「1380」

¹⁸⁶⁾土地所有者への（したがってまた総じて享樂的富への）貸付が近代的信用システムの発展以前に、イギリスにおいてさえも17世紀の最後の3分の1期にどんなに優勢だったかは、なかならず、当時の一流のイギリス商人の一人ただでなく最も重要な①理論的経済学者の一人でもあったサー・ダッドリ・ノースの所説から見て取ることができる。

①〔異文〕「理論的」←「経済〔的〕」

①「わが国で利子つきで充用されている貨幣は、まだその10分の1も、自分の事業を經營するのに利用しようとしている事業家たちには配られていないのであって、その〔659〕大部分は、奢侈品を供給するために貸し出され、また、大きな土地所有者ではあるが自分の土地が貨幣をもたらすよりも先に貨幣を支出する人々の支出を支えるために貸し出されている。そしてそうなるのは、彼らが自分の地所を売ることをきらい、むしろそれを

186) 「土地所有者への（したがってまた総じて享樂的富への）貸付が、」→「土地所有者への貸付が、したがってまた総じて享樂的富への貸付が、」

抵当に入れる方を選ぶからである。」(〔ダドリ・ノース〕『交易論』、ロンドン、1691年、6、7ページ。)

- ①〔注解〕〔ダドリ・ノース〕『交易論——主として、貨幣の、利子・鑄造・削損・増加の諸問題に注目して——』、ロンドン、1691年。この版に当たることはできなかった。校合には次のものを使った。——『リプリント経済学小論集』、ジェイコブ・H・ホランダ編、「サー・ダドリ・ノース、交易論、1691年」、バルティモア、1907年、20ページ。——この引用のなかの強調はマルクスによるものである。

18世紀にポーランドでは次のようだった。①「ワルシャワでは盛んな②手形取引が見られたが、それはおもにその地の銀行業者たちの高利によるものであり、また高利を意図したものだった。彼らは、浪費する貴人に8%またはそれ以上で貸し付けることのできた貨幣を調達するために、国外に無条件手形信用を求め、またそれを見いだしもした。すなわち、この手形信用は商品取扱業にもとづくものではなかったが、しかし、手形操作によって調達された送金が絶えなかったあいだは外国の手形支払人によって寛大に引き受けられたものである。しかし、これは、テッペルとかそのほかワルシャワの名望ある大銀行業者の破産によって手ひどい報いを受けた。」(J. G. ビュッシュ『商業の理論的・实际的説明、云々』、第3版、ハンブルク、1808年、第2巻、③233ページ。)

- ①〔注解〕この引用は、「ロンドン・ノート 1850-1853年」、第4冊から取られている(MEGA、第4部第7巻、302ページ5-14行)。——この引用のなかの強調はマルクスによるものである。
- ②〔注解〕「手形取引(Wechselgeschäft)」——ビュッシュでは「手形のごったがえし(Wechselgewühl)」となっている。
- ③〔訂正〕「233」←「232, 233」

利子禁止が教会に与えた利益。①「利子を取ることを教会は禁止していた。しかし、窮境を脱するために自分の財産を売ることを禁止してはいなかった。それどころか、貨幣の貸し手に自分の財産を一定の期間、または返済が行なわれるまで譲り渡しておいて、貸し手はそれを担保とみなすと同時に占有期間中それを利用して、自分が②手放していた貨幣の代償が得られるようにすることを、けっして禁止してはいなかった。……教会自身も、また教会に属する共同団体や聖徒団体も、ことに十字軍時代には、そこから大きな利益を引き出した。このことは、国富の一大部分をいわゆる死手に占有させることになった。なぜならば、ことに、このように固定した抵当の占有を隠しておくことはできなかったのです、ユダヤ人はこのやり方では高利貸をすることができなかったからである。……もし利子の禁止がなかったならば、教会も修道院もこんなに富裕になることはけっしてできなかったであろう。」（ビュッシュ，同前，55ページ。）

①〔注解〕この引用は、「ロンドン・ノート 1850-1853年」，第4冊から取られている（MEGA，第4部第7巻，299ページ23-35行）。

②〔注解〕「手放していた」——マルクスの草稿では entlehnten となっているが、ビュッシュの原文では entbehrten となっている¹⁸⁷⁾。

652 | ①397 | 信用制度の発展は高利にたいする反作用として実現される。¹⁸⁸⁾

①〔異文〕「397」←「391」〔MEGA は、この「391」の解説には確信がもてないとしている。〕

187) 187草稿の entlehnten のままでは、「自分が借りていた」となってしまうので、ビュッシュの原文のとおり「手放していた〔なくて済ませた〕」と訳しておく。

188) エンゲルス版ではここで改行されていない。

しかし、このことを誤解してはならない。また、けっしてそれを古代の著述家や教父やルターや¹⁸⁹⁾社会主義者たちの考える意味にとってはならない。¹⁹⁰⁾

このことが意味しているのは、利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件と諸要求とに従属するということ以上のなにもものでもないし、またそれ以下のなにもものでもないのである。¹⁹¹⁾だいたいにおいて利子生み資本は近代的¹⁹²⁾信用制度のもとでは資本主義的¹⁹³⁾生産様式の諸条件に適合させられる。高利そのものは、存続するだけでなく、①資本主義的¹⁹⁴⁾生産様式の発達している諸国民のもとでは、すべての古い立法がそれに課していた②制限から解放されるのである。利子生み資本は、資本主義的生産様式の意味では借入れがなされなような、またなされることができないような、諸個人や諸階級にたいしては、またはそのような事情のもとでは、¹⁹⁵⁾高利資本として現われる(高利資本という形態しか取らない)。個人的な必要のために借りる場合¹⁹⁶⁾(たとえば質屋¹⁹⁷⁾)、浪費の目的で借りる場合¹⁹⁸⁾(享樂的富のために)、または、生産者が資本家の生産者ではなくて、小農民、手工業者等々であり、したがってまだ¹⁹⁹⁾直接生産者が自分自身の生産諸条件の²⁰⁰⁾所有者または占有者である場合、最後に、資本家的生産者自身が③そうした小さな規模で仕事をしており、したがって、

189) 挿入——「古い」

190) エンゲルス版ではここで改行されていない。

191) エンゲルス版ではここで改行されている。

192) 「信用制度」→「信用システム」

193) 「生産様式」→「生産」

194) 「生産様式」→「生産」

195) 「高利資本として現われる(高利資本の形態だけを取る)」→「高利資本の形態を保持する」

196) 「(」および後出の「)」——削除。

197) 挿入——「で」

198) 「(」および後出の「)」——削除。

199) 「直接生産者が」→「直接生産者として」

200) 「所有者または占有者」→「占有者」

かの²⁰¹⁾自営の勤労者〔selfemploying workingmen〕によく似ている場合がそれである。

- ①〔異文〕ここに、「資本主義的生産様式の諸国民のもとでは、〔……〕すべての制限から」と書いたのち、消している。
- ②〔異文〕ここに、「すべての」と書いたのち、消している。
- ③〔異文〕「そうした小さな」——あとから書き加えられている。

資本主義的生産様式の本質的な一要素をなしているかぎりでの利子生み資本を、高利資本から区別するものは、けっしてこの資本そのものの性質または性格ではない。それは、①ただ、この資本が²⁰²⁾機能する諸条件が変化したということだけであり、したがってまた貨幣の貸し手に^{あいたい}653 相対する借り手の姿がまったく変わってしまったということだけである。財産もない男が、²⁰³⁾産業家としてであろうと商人としてであろうと、信用を受ける場合でさえも、それは、彼が資本家として²⁰⁴⁾機能し、借りた資本で不払労働を取得するであろうということが信頼されて行なわれるのである。彼に信用が与えられるのは、潜在的な資本家〔Capitalist in posse〕としての彼に与えられるのである。そして、②経済学的弁護論者たちによって非常に賛嘆されるこの事情、すなわち、財産はないが精力も²⁰⁵⁾能力^③も堅実さも事業知識²⁰⁶⁾等々もある一人の男がこのようにして資本家に転化することができる——いったいに資本主義的生産様式のもとでは各人の商業価値が²⁰⁷⁾正しく評価されるものなのである——というこの事情は、

201) 「自営の勤労者〔selfemploying workingmen〕」→「自分で労働する生産者」

202) 「機能する」—— functioniren → fungieren

203) 「産業家としてであろうと商人としてであろうと、」→「産業家または商人として」

204) 「機能する」—— functioniren → fungieren

205) 「能力も堅実さも」→「堅実さも能力も」

206) 「等々」—— 削除。

207) 挿入——「多かれ少なかれ」

既存の④個別的資本家たちにたいしては、たえず⑤ありがたくない²⁰⁸⁾数の新たな射幸騎士を戦場に連れ出すものとはいえ、資本による支配そのものを強固にし⑥、この支配の基礎を拡大して、⑦それが社会の下層からの新鮮な力によってたえず補充されることを可能にするのである。それは、ちょうど、中世のカトリック教会が身分や素性や財産を問題にしないで⑧人民のなかの最良の頭脳で²⁰⁹⁾構成されていたという事情が、²¹⁰⁾教階制⑨と俗人抑圧とを強固にするための主要な手段だったようなものである。²¹¹⁾下層諸階級〔classes inférieures〕の最もすぐれた人物を自分のなかに²¹²⁾吸収する能力が支配階級にあればあるほど、その支配はますます強固でますます危険なのである。

①〔異文〕「ただ、……だけ」——あとから書き加えられている。

②〔異文〕「経済学的」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕「も堅実さも事業知識」——あとから書き加えられている。

④〔異文〕「個別的」——あとから書き加えられている。

⑤〔異文〕「ありがたくない」←「新たな」

⑥〔異文〕ここに、「拡大して」と書いたのち、消している。

⑦〔異文〕「それが社会の下層からの新鮮な力によってたえず補充される」←
「それが新鮮な力をたえず補充する」

⑧〔異文〕「人民のなかの最良の頭脳で」——あとから書き加えられている。

⑨〔異文〕「と俗人抑圧と」——あとから書き加えられている。

それだからこそ、利子生み資本一般を追放することからではなく、反対にそれを公然と承認することから、近代的信用システムの創始者たちは出

208) 「数〔Ziffer〕」→「相当数〔Reihe〕」

209) 「構成されていた〔sich recrutiren〕」→「その教階制を形成した」

210) 「教階制」→「聖職者支配」

211) 「下層諸階級〔classes inférieures〕」→「被支配階級」

212) 「吸収する」→「取り入れる」

発するのである。

ここでは、貧民を高利から①守ろうとした高利にたいする反動、たとえば②モン・ド・ピエテ〔Monts de Piété〕（1350年にフランシュ・コンテの²¹³⁾サラン〔Salins〕に設けられ、その後1400年と1479年にイタリアのペルージャとサヴォーナに設けられたもの）のようなものについては述べない。このようなものが注目に値するのは、ただ歴史の皮肉——敬虔な願望がその実現の過程で反対物に転回するという——を示しているからでしかない。イギリスの労働者階級は、控え目な見積りによっても100%を③質屋に、モン・ド・ピエテのこの²¹⁴⁾成れの果て〔upshots〕に支払っている。1) ④ここではまた、たとえば17世紀の90年代に²¹⁵⁾紙幣（土地所有を⑤基礎とした土地銀行）によってイギリスの貴族を高利から解放しようとしたドクター・ヒュー・チェインバレインや⑥ジョン・ブリスコウなどの信用幻想についても述べないことにする。2) |

①〔異文〕「守ろうとした」—— zu schützen suchte ← schützen suchte

②〔注解〕「モン・ド・ピエテ〔Monts de Piété〕」—— 教皇庁が15世紀中葉以降、Montas pietatis（慈善の山々）という名称のもとに設立した質屋で、民衆を高利から守るものだと言われた。しかし、まもなくそれ自身が高利を要求するようになった。「地金。完成した貨幣システム」でマルクスは、サン・シモン派がモン・ド・ピエテを銀行の先駆者であって、高利とユダヤ人にたいする反動だったと見ていたと確言した（MEGA, 第4部第8巻, 41ページ, を見よ²¹⁶⁾）。

③〔異文〕「質屋」—— Pfandhaus ← Pfandverle[ih]

213) 「サラン〔Salins〕」—— エンゲルス版では Sarlins と誤記されていた。MEW 版でも訂正されていない。新日本出版社新版（1997年）では、「サランの誤りであろう」とされている。

214) 「成れの果て〔upshots〕」→「後身〔Nachkömmlinge〕」

215) 「紙幣（土地所有を基礎とした土地銀行）によって」→「土地所有を基礎とした紙幣を発行する土地銀行によって」

216) 後出の注281を見よ。

- ④〔注解〕以下の部分と脚注2)とのなかで言及されているのは次の諸著書である。——ジョン・プリスコウ『百万〔ポンド〕法、富くじ法、および、イングランド銀行の最近の資金に関する一論……』、ロンドン、1696年。[ヒュー・チェインバレイン]『イングランド銀行企画の簡潔な説明と題する小冊子についての若干の有用な省察……』、第2版、ロンドン、1694年。ヒュー・チェインバレイン『イングランド土地銀行と呼ばれるのが適切な総合銀行を設立することの提案』、ロンドン、1695年。——カール・マルクス「ジョン・フラーンシス『イングランド銀行史』からの抜粋」、MEGA、第4部第7巻、539-540ページ、をも見よ。

⑤〔訂正〕「基礎とした」—— *gegründete* ← *gegründet*

⑥〔異文〕「ジョン」——あとから書き加えられている。

【原注1】²¹⁷⁾タケット〔は次のように言う〕。「貨幣にたいするプレミアムがこんなに法外なものになるのは、同じ月のうちに頻繁に質の出し入れが行なわれる結果であり、また、ある品を受け出すために別の品を入質して、そのさいわずかな差金を手に入れることによるものである。①ロンドンには240の公認の質屋があり、地方には約1450ある。充用資本は約100万と見積もられる。この資本が年に少なくとも3回転して、毎回平均33¹/₂%をあげる。したがって、イギリスの下層諸階層は、質流れになる品物での損失を別としても、100万の一時しのぎの借金にたいして年々100%を支払っているわけである。」(J.D. タケット『労働人口の過去および現在の状態の歴史』、ロンドン、1846年、第1巻、114ページ。)【原注1)終り】

- ①〔注解〕タケットからの引用の以下の部分は、タケットでは次のようになっている。——「首都には約240の公認の質屋があり、地方の町や村にはほぼ1450ある。……充用資本が100万ポンド・スターリングをいくらか超えると見

217) 「タケット〔は次のように言う〕。」——削除。

積もだけの十分な根拠がある。この資本は1年間のうちに3回転して、毎
回平均 $33\frac{1}{2}\%$ をあげるものと推定される。この計算によれば、イギリスの
下層諸階層は、質流れになる品物での損失を別としても、一時しのぎの借金
の使用にたいして1年に約100万を支払っているものと見られる。」

【原注2】彼らは彼らの著書の表題のなかでさえ次のことを主要目的とし
て掲げている。「土地所有者の一般の福祉，土地の価値の大きな増加，貴
族と紳士などの租税の」免除，「彼らの年々の受益権の増大，等々。」〔彼
らの幻想が実現すれば，〕ただ高利貸だけが，すなわち，フランスからの
侵入軍でも加えることができなかったような大損害を貴族とヨーマンリー
とに与えた，国民のこの [654] 最悪の敵だけが損をするというわけである。

【原注2）終り】

[654] | ①398 | ②12世紀および14世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつく
られた③信用組合は，昔ながらの高利の支配や貨幣取引の独占から解放さ
れようとする海上貿易²¹⁸⁾の諸要求とそれに基礎を置く卸売商業との④要求
から生まれたものである。これらの都市共和国に設けられた本来の銀行は
同時にまた²¹⁹⁾公信用 (Public Credit) のための (徴取予定の租税を担保
として国家に前貸をするための) 施設として現われたのであるが，これに
ついて²²⁰⁾忘れてならないのは，かの²²¹⁾⑤商人組合は，それら自身これら
の国の²²²⁾中心人物 [Matador] であり，²²³⁾そのさい，自分たち自身と同

218) 「の諸要求」——削除。

219) 「公信用 (Public Credit) のための (徴取予定の租税を担保として国家に前貸をするため
の) 施設として現われた」→「公信用のための施設として現われ，この施設から国家は徴取
予定の租税を担保として前貸を受けた」

220) 「忘れてならない」→「忘れることが許されない」

221) 「商人諸組合」→「信用組合をつくった商人たち」

222) 「中心人物 [die Matadore]」→「一流の人々 (die ersten Leute)」

223) 「そのさい，」——削除。

224) 「{ } および後出の「{ }」——削除。

じく自分たちの政府をも高利から解放する²²⁴⁾{またそれによって同時に²²⁵⁾国家機構〔Staatswesen〕を自分たちに従属させる} ことに関心をもって
いた、ということである。1) それだからこそ、イングランド銀行が設立されようとしたとき、トーリー党も次のように抗議したのである。⑥「銀行は共和国的な施設である。繁栄した銀行がヴェネツィアやジェノヴァやアムステルダムやハンブルクにはあった。しかし、だれがフランス銀行とかスペイン銀行とかいうものを耳にしたことがあるだろうか。」

①〔異文〕「398」←「392」〔MEGA では、この「392」の解説には確信がもてないとしている。〕

②〔注解〕ここから原注1) がつけられた箇所までの部分²²⁶⁾については、マリ・オジェ『公信用ならびに古代より現代にいたるその歴史について』、パリ、1842年、200-202ページを見よ。

③〔異文〕「信用組合〔Creditassociationen〕」←「組合〔Associationen〕」

④〔異文〕「要求」←「必要」

⑤〔異文〕「商人組合〔Kaufmannsassociationen〕」←「組合〔Associationen〕」

⑥〔注解〕トマス・バビントン・マコーリ『ジェイムズ二世即位後のイギリス史』、第4巻、ロンドン、1855年、499ページ。

【原注】1) ①たとえば、²²⁷⁾チャールズ二世も②まだ20-30%もの法外な③高利や打歩を「金匠」(銀行業者の先駆者)に支払わなければならなかった。このように有利な取引に誘われて、金匠たちは「ますます多くの前貸を王に与え、すべての歳入を先取りし、議会在が貨幣支出を可決すればすぐにそ

225) 「国家機構〔Staatswesen〕」→「国家」

226) MEGA はこの注解の該当箇所を「654ページ1-2行」と指示しているが、「654ページ1-12行」の誤りであろう。

227) 挿入——「イギリスの」

れを質に取り、また自分たちどうしのあいだでも争って手形や支払指図証や貸借割符の買入れや質取りを行なうようになり、したがって実際にはすべての歳入が彼らの手を通るようになった。」(ジョン・フラーンシス『イングランド銀行史、云々』、ロンドン、1848年、第1巻、31ページ。)④「銀行の設立はすでに⑤以前からもしばしば提案されていた²²⁸⁾⑥が成功しなかった。それはついに必要になった。」(同前、38ページ。)⑦「この銀行は、高利貸に吸い取られていた政府²²⁹⁾にとっても、議会の認可を保証として貨幣を²³⁰⁾手ごろな利子率で手に入れるために必要だった。」(同前、59、60ページ。)【原注1)終り】

①〔注解〕この原注のなかの引用については、「ロンドン・ノート 1850-1853年」、第6冊(MEGA、第4部第7巻、539-540ページ)を見よ。

②〔異文〕「まだ」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕「高利」←「利子」

④〔注解〕この引用箇所はフラーンシスでは次のようになっている。——「国民銀行の設立が必要な多くの理由があった。……事実は、それには多くの時間が必要だったということである。」

⑤〔異文〕「以前からも」——あとから書き加えられている。

⑥〔異文〕「が成功しなかった」——あとから書き加えられている。

⑦〔注解〕この引用箇所はフラーンシスでは次のようになっている。²³¹⁾——「議会の認可を保証として、貨幣を手ごろな利子率で前貸しすることができるとなんらかの施設にたいする、当時存在していた必要……。」

228) 「が成功しなかった〔vergeblich〕」——削除。

229) 挿入——「だけ」

230) 「手ごろな〔vernünftig〕」→「我慢のできる」

231) 草稿でフラーンシスからの引用文とされているのは、「ロンドン・ノート 1850-1853年」、第6冊(MEGA、第4部第7巻、540ページ)でマルクスが要約した文言である。

①²³²⁾アムステルダム銀行(1609年)は(ハンブルク銀行1619年と同じく),近代の信用制度の発展のなかで一時期を画するものではない。〔それは〕純粋な預金銀行〔だった〕。この銀行が発行した手形は実際にはただ預託された²³³⁾②貴金属(または硬貨〔espèces〕)の受領証でしかなく,それがただその受取人の裏書きによつて流通しただけだった。しかし,オランダでは商業や製造工業といっしょに③商業信用や貨幣取扱業が発展したのであって,利子生み資本は発展²³⁴⁾そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていた。このことは²³⁵⁾利子率の低いことにも現われていた²³⁶⁾(量的に)。しかし,オランダは17世紀には,ちょうど今日のイギリスのように,経済的発展の模範国として認められていた。貧窮を基盤とした古風な高利の独占は,オランダではおのずから覆えられていたのである。

①〔注解〕〔以下の三つの文²³⁷⁾については,〕ヨハン・ゲオルク・ビュッシュ『銀行および鑄貨制度に関する全著作集』,ハンブルク,1801年,160-163ページ,および,215-217ページ,を見よ²³⁸⁾。

②〔異文〕「貴」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕「商業信用や」——あとから書き加えられている。

18世紀の全体をつうじて,オランダにならって,利子生み資本を商業資

232) 「アムステルダム銀行(1609年)は(ハンブルク銀行1619年と同じく),」→「1609年のアムステルダム銀行も,ハンブルク銀行(1619年)も,」

233) 「貴金属(または硬貨〔espèces〕)」→「既鑄造または未鑄造の貴金属」

234) 挿入——「行程」

235) 挿入——「すでに」

236) 「(量的に)」——削除。

237) MEGAはこの注解の該当箇所を「654ページ16行」と指示しているが,「654ページ16-20行」とあるべきところであろう。

238) マルクスは,「ロンドン・ノート,1850—1853年」第4冊のなかで,ビュッシュの『銀行および鑄貨制度に関する全著作集』から抜粋しており,そのなかにはこの注解で上げられている諸ページも含まれている(MEGA,第4部第7巻,332,334ページ)。

本と産業資本に従属させてその逆にはならないようにするために、利子率の強制的な引下げを求める叫びが響いた²³⁹⁾（そして立法はこの趣旨で行動した）。^[655]²⁴⁰⁾主唱者として〔立っていたのは〕、①標準的なイギリス²⁴¹⁾（個人〔Privat〕）銀行業の父、サー・ジョサイア・チャイルド〔だった〕。②彼は、²⁴²⁾モウジズ・アンド・サン商会が「個人裁縫業者〔Privat-schneider〕」の独占にたいする攻撃者として叫ぶのとまったく同様に、高利貸の独占に③反対を宣言する。このジョサイア・チャイルドは、同時にイギリスの²⁴³⁾株式売買業の父でもある。²⁴⁴⁾（こうして、彼、④東インド会社の独裁者は、²⁴⁵⁾自由貿易〔Free Trade〕の名においてこの会社の独占を擁護する。）⑤トマス・マンリ（『貨幣利子誤論』）に反対して、たとえば、チャイルドは言う。「恐れおののいている高利貸一味の擁護者として、彼は、私が最も弱い点だと言ったあたりにその主要砲台を築いている。……彼は、低い利子率はそれ⑥（富）の原因だということを真向から否定して、前者はただ後者の結果でしかない、と断言する。」（120ページ。）（『商業に関する論考、云々』、1669年、翻訳、アムステルダムおよびベルリン、1754年。）「⑦一国を富ますものが商業だとすれば、そして利子の⑧引下げが商業を増進させるとすれば、利子の引下げまたは高利の制限は疑いもなく一国民の富を生む主要な原因である。同じ事柄が同時にある事情のもとでは原因であり別の事情のもとでは結果でありうると言っても、けっしておかしくはない。」（同前、155ページ。）「卵は鶏の原因であり、鶏は卵の原因である。利子の引下げは富の増加の原因になることができるし、富の増加はいっそう大きな利子引下げの原因になることができる。

239) 「（ ）および後出の「 ）」→「——」および「——」

240) 「主唱者として」→「主唱者は……だった」

241) 「（ ）および後出の「 ）」——削除。

242) 挿入——「大量既製服裁縫業者」

243) 「株式売買業」—— Stockjobbing → Stockjobberei

244) 「（ ）および後出の「 ）」——削除。

245) 「自由貿易〔Free Trade〕」→「貿易自由〔Handelsfreiheit〕」

⑨²⁴⁶⁾利子の引き下げはなんらかの法律によって行なうことができる。」(同前, 159ページ。)
 「私は^⑩勤勉の弁護者であるが、^⑪私の反対者は怠惰と無為とを弁護するのである。」(同前, 179ページ。)

①〔異文〕「標準的な」——あとから書き加えられている。

②〔注解〕このパラグラフの以下の部分は、カール・マルクス『経済学批判<1861-1863年草稿>』から、手を加えて取られている (MEGA, 第2部第3巻第5分冊, 1557ページ14行~1558ページ4行)。—— MEGA, 第2部第3巻第5分冊, 1747ページ30-34行をも見よ²⁴⁷⁾。

③〔異文〕「反対を宣言する」←「憤激する」

④〔注解〕「東インド会社」——〔MEGA〕380ページ2-3行への注解を見よ。²⁴⁸⁾

⑤〔注解〕「トマス・マンリ (『貨幣利子誤論』)」——トマス・マンリが匿名の著作『貨幣利子誤論』の著者であることは一義的には証明されない²⁴⁹⁾。マンリへの示唆は、ジョサイア・チャイルドの著書『商業に関する論考……』への序言のなかに含まれている。

⑥〔注解〕「(富)」——マルクスの注釈。

⑦〔注解〕次の引用の最初の文は、チャイルドの原文では次のようになっている。——「というのは、すでに十分に証明したと思うが、どの王国でもそれを富裕にするものが商業だとすれば、そして利子の低下が商業を増進させる

246) 「利子の引き下げは一本の法律によって行なうことができるのである。」——削除。

247) そこには次のように書かれている。——「ちなみに、ロンドンの銀行業者の祖であるチャイルドは高利貸の「独占」にたいする敵対者だったが、それは、モーイズ・アンド・サン商會がその広報のなかで、自分たちは小裁縫業者たちの「独占価格」にたいする反対者だと宣言しているのとまったく同じ意味においてであった。」

248) ここで指示されている注解はオランダ東インド会社についてのものであって、オランダ東インド会社は当該箇所で触れられているイギリス東インド会社とは別物である。MEGAの注解が、「混乱」のなかで言及されたイギリス東インド会社の箇所でも、誤って、ここと同じオランダ東インド会社についての注解を指示していることは、すでに拙稿「信用制度下の流通手段」および「通貨原理と銀行立法」で指摘した (126ページ注136)。

249) 匿名の書である『貨幣利子誤論』の著者はマンリではない。マルクスの記述は誤っており、それへのMEGAの注解も不十分である。

とすれば、利子の引下げまたは高利の制限——これはつねにローマ人たちとすべての²⁵⁰⁾賢明かつ富裕な国民との目的であった——は、疑いもなく一国民の富の主要な生産的な原因だからである。」となっている。

⑧〔異文〕「引下げ」←「減少」

⑨〔注解〕この文はチャイルドでは次のようになっている。——「しかしながら、それが最も迅速に、また最も効果的になされるのははなんらかのよい法律によってであり、……」

⑩〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

⑪〔注解〕この文はチャイルドでは次のようになっている。——怠惰と無為とを弁護する彼〔私の反対者〕の返答は……」

高利にたいするこの激しい攻撃²⁵¹⁾——あるいは利子生み資本の産業資本への従属〔——〕は、²⁵²⁾資本主義的生産様式の、近代的銀行制度の、これらの条件を①つくりだす有機的創造物の先駆でしかないのであって、この銀行制度は、一方ではすべての死蔵されている貨幣準備を集中してそれを貨幣市場に投じることによって高利資本からその独占を奪い取り、他方では信用貨幣の創造によって貴金属そのものの独占を制限するのである。|

①〔異文〕「つくりだす〔herstellen〕」←「創造する〔schaffen〕」

[659] | ①402 | ここでチャイルドの著書のなかに見いだされるのとまったく同じように、17世紀の最後の3分の1期²⁵³⁾（と18世紀の初め²⁵⁴⁾②（③ロ

250) 「賢明〔sage〕」——MEGAの注解ではfageと誤植されている。

251) 「——あるいは利子生み資本の産業資本への従属〔——〕」→「利子生み資本を産業資本に従属させようとするこの要求」

252) 「資本主義的生産様式の、近代的銀行制度の、これらの条件をつくりだす」→「資本主義的生産のこれらの条件を近代的銀行制度においてつくりだす」

253) 「() および後出の「) 」」——削除。

254) 「(ロー)」——削除。

一))の④イギリスの²⁵⁵⁾銀行制度に関する²⁵⁶⁾(諸銀行の設立についての)すべての著述のなかでも、高利にたいする反対、高利からの商業や産業²⁵⁷⁾(や国家)の解放²⁵⁸⁾が見いだされるであろう。また同時に、信用や貴金属独占排除の²⁵⁹⁾もろもろの⑤奇跡的作用、紙券の貴金属代位、等々についての²⁶⁰⁾幻想も見いだされるであろう。イングランド銀行やスコットランド銀行の創立者であるスコットランド人⑥ウィリアム・⑦パターソンは、まったく⑧ロー第一世である。1)

①〔異文〕「402」←「394²⁶¹⁾」

②〔異文〕「(ロー)」——挿入記号なしに、行の上に書かれている。

③〔注解〕「ロー」——資本主義的信用の発展が始まったばかりの時期に、ジョン・ローは、豊富な貨幣が経済を活性化できると主張した。彼によれば、貨幣の増加はなによりもまず土地と労働力とのよりよい利用を保証し、企業家精神を促進するのである。貨幣量を増大させるためにローが推奨したのは、銀行システムの拡充と諸銀行の貨幣金属準備をはるかに超える銀行券を使って信用を与えることであった。彼は、一定期間にわたって貨幣金属への銀行券の換金を停止することが災厄と見られてはならないと主張した。さらにローは、同時に経済政策の用具としても機能する国営銀行を支持した。／ローがその企図を実現する機会をえたのは、フランスのフィリップ二世〔オルレアン公フィリップ〕の摂政政治のもとであった。1716年に彼はまず私営銀行を設立したが、この銀行は1718年には国立銀行に変えられた。一般に

255) 「銀行制度に関する」—— über d. Bankwesen → über Bankwesen

256) 「(諸銀行の設立についての)」——削除。

257) 「()および後出の「) 」」——削除。

258) 挿入——「の要求」

259) 「もろもろの奇跡的作用〔Wunderwirkungen〕」→「奇跡的作用〔Wunderwirkung〕」

260) 挿入——「とてつもない」

261) 「394」——マルクスが脚注のなかで(本稿215ページ注解①および筆者注264を見よ)、この次のページを明確に394と書いていたことから見て、このページのはじめは「393」と書かれていたのではないかと思われる。

通用する銀行券を発行し、バリの高利貸たちの信用に比べて低い利子で入手できる信用を与えることで、経済を活性化することにひとまず成功した。ローが1717年に設立した第2の大企業がルイジアナ会社または西方会社（ミシシッピー会社）であって、これも同じく国家と密接に結びつけられていた。この会社は大きな範囲の資本家たちに株式を与えた。それとともに、証券投機と株式取引での投機とが未曾有の規模で展開された。ローの諸銀行は信用をこのような株式の購買にも与えたので、また、ミシシッピー会社にもたらされる貨幣は国債証券の購買に——ほとんどすべての国債の買い取りに——用いられたので、ローの銀行券は不可避免的にインフレ的な紙幣に転化せざるをえなかった。1720年末には、この銀行券はもはや法的支払手段としては通用せず、ローのシステムは完全に破産した。——「ロンドン・ノート 1850-1853年」には、詳しく言えばとりわけジェイムズ・ステューアートの著書からの抜粋である「経済の原理の研究（続き）」には、「ローの銀行と証かし [Laws Bank und Dodge]」についての大量のデータが含まれている（MEGA, 第4部第8巻, 433-434ページ, および, MEGA 第4部第7巻, 524-525ページを見よ）。

- ④〔異文〕「イギリスの」——あとから書き加えられている。
- ⑤〔異文〕「奇跡的作用」←「作用」
- ⑥〔注解〕マルクスが「ロー一世」と呼んだウィリアム・パターソンについては、「ロンドン・ノート 1850-1853年」での、ジョン・フラーンシス『イングランド銀行史, その時代と伝統』からの抜粋を見よ（MEGA, 第4部第7巻, 539-540ページ）。
- ⑦〔訂正〕「パターソン」—— Paterson ← Patterson
- ⑧〔注解〕前出の注解をみよ。

【原注】①1) イングランド銀行にたいしては「すべての金匠や質屋が怒りの叫びをあげた。」(②③マコーリ, 第4巻, 499ページ。) ④⑤「最初の10年間, イングランド銀行はいろいろな大きな困難と戦わなければならなかつ

た。外からの大きな敵対があった。同行の銀行券は額面を著しく下回っていた。……金匠たちはイングランド銀行にたいして大いに陰謀をめぐらした。〔 〕 {金匠たちの手中では貴金属取引が²⁶²⁾この種の銀行業者の土台 [だった。]} 「〔 〕」なぜならば、この銀行によって彼らの取引は減らされ、彼らの [660] 割引率は押し下げられ、彼らの対政府取引が²⁶³⁾彼らの敵 [イングランド銀行] の手に渡ってしまったからである。」(J. フランシス、同前『イングランド銀行史』), 73ページ。)

- ①〔異文〕マルクスはまず、以下の脚注1)の最初のパラグラフを脚注1)として書き、続けて脚注2)として、後出の脚注3)となっている、「すでに1697年に『イングランドの利子の若干の考察』で〔述べられている。〕」という1行の注を書いた。そのあとで、この脚注2)を脚注3)に変更し、その下に脚注1)の続き(第2パラグラフ)を書いた。そしてその下に「2)403ページの下部にあるこの注を見よ〔Siehe diese Note p.403 unten.〕。」と書いた(マルクスは「403」を誤って「394」と書いた)。マルクスがこれによって指示しているのは、彼が403ページの下部に、「前ページのための注2)」というしるしをつけて書いた文章である。以上の理由から、これらの脚注をここでのように配置した。²⁶⁴⁾

- ②〔訂正〕「マコーリ」—— Macaulay ← MC Caulay

- ③〔注解〕トマス・バビントン・マコーリ『ジェイムズ二世即位以後のイギリ

262) 「この種の銀行業者の土台 [だった]」→「幼稚な銀行業務の土台として役だった」

263) 「彼らの敵 [イングランド銀行]」→「この敵」

264) この異文注で MEGA 編集部は「394ページ」というマルクスの指示を単純に「403ページ」の誤記としているが、これはたんなる「誤記」ではなく、マルクスがこのページを書くときには、のちの403ページは実際に394ページであった可能性が大きい。しかも、この「394」という数字の前後には非常に大きい空気があって、この数字自体が、あとから書き込む予定で作ってあった空白に実際にあとから書き込んだものであることを示唆している。以上のところから推定されるのは、この脚注を書いたときには、まだ次ページのページ番号がどうなるかが確定しておらず、のちに次ページがいったん394ページとされてこのページ番号が書かれたが、さらにそののちにそれがさらに403ページに修正された、という経緯である。

ス史』, 第4巻, ロンドン, 1855年。

④〔注解〕この引用については、「ロンドン・ノート 1850-1853年」, 第6冊 (MEGA, 第4部第7巻, 540ページ) を見よ。

⑤〔注解〕この引用は、フラーンシスでは次のようになっている。——「金匠たちは彼らの大競争者をねたんでいた。彼らの仕事は減少し、彼らの割引〔率〕は低下し、彼らの対政府取引は彼らの敵の手に渡ってしまっていた。筆者は、最初の10年間にイングランド銀行の理事たちが外国との争いや国内の不和から生じた大きなもろもろの困難を経験したことを納得するのに十分なだけの証拠を見てきた。……同行の銀行券は額面を著しく下回っていた。」——「ロンドン・ノート 1850-1853年」, 第6冊から取られている (MEGA, 第4部第7巻, 540ページ11-13行)。

²⁶⁵⁾初めから、銀行業者は（彼が銀行券等々によって手に入れる利潤を度外視しても）個人資本家〔Privatcapitalist〕や個人高利貸〔Privatwucherer〕よりも安く貸すことができる。²⁶⁶⁾それは一部は、彼が事業を営む規模のためであり、①もろもろの資本節約のためであり、彼がすべての商業従事者や産業家の生産事情をあまねく見通しているためであり、そしてとくに、彼によって貸し付けられて利潤をもたらすように利用される資本にたいして、彼の私的資本〔Privatcapital〕がきわめてわずかな関係しかもっていないためである。「借り手の選択にさいして比較的だまされやすい土地所有者や資本家にできるであろうよりもずっといい取り決め

265) 「初めから、銀行業者は（彼が銀行券等々によって手に入れる利潤を度外視しても）個人資本家〔Privatcapitalist〕や個人高利貸〔Privatwucherer〕よりも安く貸すことができる。」→「『サン-シモン』の学説。解説。第1年。1828/29年」, 第3版, バリ, 1831年, のなかの次の箇所にはすでにクレディ・モビリエへの萌芽がひそんでいる。もちろん、銀行業者は資本家や個人高利貸よりも安く前貸しすることができる。」

266) 「それは一部は、彼が事業を営む規模のためであり、もろもろの資本節約のためであり、彼がすべての商業従事者や産業家の生産事情をあまねく見通しているためであり、そしてとくに、彼によって貸し付けられて利潤をもたらすように利用される資本にたいして、彼の私的資本〔Privatcapital〕がきわめてわずかな関係しかもっていないためである。」——削除。

で、すなわちより低い利子で、産業家たちに資金を供給することが彼らには可能である。」(②『サン・シモンの学説。解説。第1年。1828-1829年』, 第3版, パリ, 1831年, 202ページ。)だが、²⁶⁷⁾彼ら自身は、注のなかで次のようにつけ加えている。「不労者〔oisifs〕と勤労者〔travailleurs〕とのあいだを銀行業者が媒介することから生じるはずの利益は、われわれの無秩序な社会が利己主義に、いろいろな形で詐欺瞞着として現われる便宜を提供していることによって、しばしば帳消しにされ、台無しにさえもされる。銀行業者たちはしばしば勤労者と不労者とのあいだにはいりこんで、このどちらをも社会全体の損害において搾取するのである。」(同前。)ここでは、capitaliste industriel〔産業資本家〕とすべきところが travailleur〔勤労者〕となっている。なお、近代的銀行業が処理する資金を③たんに不労者の資金と見るのもまちがいである。第1に、それは、産業家や商人が資本のうち²⁶⁸⁾(貨幣準備として)²⁶⁹⁾(またはこれから投下されるべき資本〔として〕)一時的に貨幣形態で遊休させておく部分である。だから、不労の資本〔capital oisif〕ではあるが、不労者の資本〔capital des oisifs〕ではない。第2に〔それは〕²⁷⁰⁾永久的または一時的に蓄積に向けられる、すべての人々の収入や貯蓄の一部〔である〕。そして、どちらも銀行システムの性格にとつて本質的なものである。【原注1)終り】

①〔異文〕「もろもろの資本節約のためであり、」——あとから書き加えられている。

②〔注解〕この著作の著者は、サン・タマン・バザールおよびバルテルミ・プロスペール・アンファンタンである。

267) 「彼ら」→「著者たち」

268) 「() および後出の「」」——削除。

269) 「() および後出の「」」——削除。

270) 「永久的または一時的に蓄積に向けられる、すべての人々の収入や貯蓄の一部」→「すべての人々の収入や貯蓄のうちから永久的または一時的に蓄積に向けられる部分」

③〔異文〕「たんに」——あとから書き加えられている。

〔660〕すでにイングランド銀行の設立に先だって1683年には「国立信用銀行」なるものの計画²⁷¹⁾〔があったが〕、²⁷²⁾その目的の一つは次のことだった。すなわち、①「事業家たちが多量の商品をもっている場合には、この銀行を頼りにして彼らの商品を預託し、彼ら自身の滞貨を担保として信用を調達し、彼らの使用人を就業させて、よい市場が見つかるまでは損をして売らないで彼らの事業を拡張することができるということ」だった。²⁷³⁾「かなりの苦労の後に、この②信用銀行はビショップスゲイト・ストリートのデヴンシャ・ハウスに設立された。²⁷⁴⁾おもな目的は、商人や製造業者への商品を担保とする貨幣前貸だった。これらの商品を担保にその価値の4分の3を貸し付け、また預金者にはそれらの総額にあたる手形が与えられた。この手形に流通力を与えるために、それぞれの²⁷⁵⁾事業で、²⁷⁶⁾定められた人数の人々が、²⁷⁷⁾商業上の事項を規制するための組合を結成した。したがって、このような手形を所持する個人はだれでも、現金払を申し出た場合と同じように容易に、²⁷⁸⁾組合から²⁷⁹⁾財貨ないし商品を受け取ることができた。③この信用銀行は繁昌しなかった。機構が複雑すぎたし、商品が減価したさいの危険が大きすぎたのである。」

①〔注解〕このパラグラフの以下の引用は、ジョン・フラーンシス『イングラ

271) 挿入——「が生まれたが」

272) 「その諸目的の一つは」→「その目的はなかんずく」

273) エンゲルス版ではこの引用は、引用ではなくマルクスのテキストとされている。

274) 「おもな目的は、商人や製造業者への商品を担保とする貨幣前貸だった。これらの商品を担保にその価値の4分の3を貸し付け、また預金者にはそれらの総額にあたる手形が与えられた。」→「この銀行は産業者や商人に、預託商品を担保として、その価値の4分の3を手形で貸し付けた。」

275) 「事業」→「事業部門」

276) 「定められた人数の」→「ある人数の」

277) 「商業上の事項を規制するための」——削除。

278) 挿入——「その手形と引き換えに」

279) 「財貨ないし商品」→「商品」

ンド銀行史, その時代と伝統』, 第3版, 第1巻, ロンドン, 1848年, 40-41ページ。——「ロンドン・ノート 1850-1853年」, 第6冊から取られている(MEGA, 第4部第7巻, 539ページ16-30行)。

②〔注解〕この強調はマルクスによるものである。

③〔注解〕この一文はフラーンシスでは次のようになっている。——「この信用銀行は繁盛したとは思われない。」

このような、イギリスの近代的信用制度の形成に理論的に随伴しそれを促進する著述の現実の内容によつて見れば、そこに見いだされるものは、利子生み資本を、一般に貸付可能な生産手段を、資本主義的生産様式の諸条件の一つとしてこの生産様式に²⁸⁰⁾従属させるということにほかならないであろう。たんなる文面によって見れば、用語の末に至るまで①②サン・シモン派のもろもろの銀行・信用幻想と一致していることにしばしば驚かされることであろう。2)

①〔異文〕「サン・シモン派のもろもろの銀行・信用幻想と一致していることにしばしば驚かされる」←「サン・シモン派のもろもろの幻想と一致していることが奇異の感を与える」

②〔注解〕「サン・シモン派のもろもろの銀行・信用幻想」——マルクスは、ジェイムズ・ミルの書『経済学綱要』からの抜粋を含む「パリ・ノート」のなかで、サン・シモン派の銀行・信用幻想を批判した。そのさい彼は、労働疎外の理論から出発して、サン・シモン派が銀行・信用制度に人間の自己疎外の止揚を期待するとき、彼らは銀行・信用制度の外観にだまされているのだ、ということを確認した。(MEGA, 第4部第2巻, 450ページをみよ。)サン・シモン派についての覚え書きは、抜粋ノート「地金。完成した貨幣システム」にも含まれている。ここでマルクスが強調しているのは、サン・シ

280) 「従属させるということ」→「従属させるという要求」

モン派がモン・ド・ビエテを銀行の先駆者だと見なし、銀行もモン・ド・ビエテもともに高利にたいする反動だと見なしていた、ということである。とりわけ彼にとって注目すべきことだったのは、サン・シモン派が銀行を、生産用具を寄生的諸階層から、ブルジョアの産業家にだけでなく、労働者の手に移すことができる武器とみなしていたという点である。²⁸¹⁾ (MEGA, 第4部第8巻41ページを見よ。)

【原注】²⁸²⁾2) 重農学派では²⁸³⁾「cultivateur〔耕作者〕」は現実の耕作者を意味しないで⁶⁶¹²⁸⁴⁾「fermier〔借地農業者〕」を意味しているのであるが、それとまったく同じように、²⁸⁵⁾「travailleur〔勤労者〕」はサン・シモンでは、またつねに一貫して彼の学派では、²⁸⁶⁾「ouvrier〔労働者〕」を意味しないで産業資本家や商業資本家を意味している。「travailleur」は助手や補助者や²⁸⁷⁾筋肉労働者〔ouvriers〕を必要とする。彼は、才知ある人、熟練した人、忠実な人を求める。彼は彼らに労働をさせ、そして彼らの労働は生産的である。」(①『サン・シモン派の宗教。経済学と政治学』、パリ、1831年、104ページ。) けっして忘れてはならないのは、サン・シモンは彼の最後の著述②『新キリスト教』のなかではじめて直接に労働者階

281) マルクスは「地金。完成した貨幣システム」のなかで、それ以前に行っていたイザーク・ペレール『産業と金融にかんする講義……』、パリ、1832年、からの抜粋を利用して、「XXXIX. サン・シモン派 (St. Simoniens)」についてのコメントを残している。そこでマルクスは次のように書いている。——「サン・シモン派にとっては、彼らが銀行を（手形証書、紙幣、公債とともに）、資本、生産用具を、怠惰な土地所有者や資本家からブルジョアの産業家に移すさいの武器だと見ていたように、銀行制度という新たな組織は、労働者への生産用具の移転を媒介すべきものののである。（VII ページ。）彼らはモン・ド・ビエテを銀行の先駆者だと見なし、銀行もモン・ド・ビエテもともに、貴金属の所有を独占していたユダヤ人の高利等々にたいする反動だと見なしていた。」(MEGA, 第4部第8巻、41ページ。)

282) この注の初めの部分と最後の部分との左欄外には、赤鉛筆で、大きく囲むような線が引かれている。

283) 「」および後出の「」——削除。

284) 「「fermier〔借地農業者〕」→「大借地農業者 (Großpächter)」

285) 「」および後出の「」——削除。

286) 「「ouvrier〔労働者〕」→「労働者 (Arbeiter)」

287) 「筋肉労働者〔ouvriers〕」——エンゲルス版でも強調されている。

級の代弁者として現われて、この階級の解放を彼の努力の最終目的として言明しているということである。それ以前の彼の著述は、すべて、実際にはただ封建社会に対比しての近代ブルジョア社会の賛美、またはナポレオン時代の元帥や²⁸⁸⁾法律家〔legisten〕²⁸⁹⁾等々に対比しての産業家や銀行業者の賛美でしかないのである。同じ時代のオウエンの著述に比べてなんという違いだろうか！²⁹⁰⁾前に引用した箇所が示しているように、サン・シモンの後継者たちにあっても、やはり産業資本家はとりわけすぐれた意味での「travailleur」〔„travailleur“ par excellence〕である。彼らの著述を批判的に読むならば、彼らの信用・銀行夢想の²⁹¹⁾現実〔Realität〕が、なんと²⁹²⁾③クレディ・モビリエだったのだ、ということに驚きはしないであろう。ついでに言えば、このような形態は、ただ、²⁹³⁾近代的信用システムも大工業も²⁹⁴⁾十分には発展していなかったフランスのような国だけで優勢になることができたのである。(イギリスやアメリカでは²⁹⁵⁾ありえなかった。)【原注2)終り】

288) 「法律家〔legisten〕」→「法律製造家〔juristische Gesetzfabrikanten〕」

289) 「等々」——削除。

290) エンゲルス版ではここに、エンゲルスによる次の注がつけられている。——「もし原稿に手を加える機会があったら、マルクスはかならずこの箇所をひどく書きなおしたことであろう。この箇所は、フランスの第二帝政下での以前のサン・シモン派の役割に示唆されたもので、フランスでは、ちょうどマルクスがこの箇所を書いていたときに、この派の世界救済的な信用幻想が歴史の皮肉によって前代未聞の大仕掛けな欺瞞として実現されたのである。後にはマルクスはサン・シモンの天才と百科全書的頭脳とについてひたすらに感嘆しながら語っていた。サン・シモンが彼の初期の諸著作のなかでブルジョアジーと当時フランスでやっとなんと発生しかかっていたプロレタリアートとの対立を無視したとしても、また彼がブルジョアジーのなかの生産に従事する部分を勤労者のうちに数えたとしても、それは、資本と労働とを和解させようとしたフリエの見解に対応するものであって、当時のフランスの経済的政治的状態から説明のできることである。オウエンはこの点でもっと先のほうを見ていたのであるが、それは、彼が違った環境のなかに、すなわち産業革命やすでに尖鋭化していた階級対立のただなかに、生きていたからである。—— F. エンゲルス」

291) 「現実〔Realität〕」→「実現〔Realisierung〕」

292) 挿入——「以前のサン・シモン主義者エミール・ペレールの創設した」

293) 「近代的」——削除。

294) 「十分には」→「現代の高さまで」

295) 挿入——「こんなものは」

- ①〔注解〕[バルテルミ・プロスペール・アンファンタン]『経済学と政治学（サン・シモン派の宗教）』，パリ [1831年]。
- ②〔注解〕クロード・アンリ・ルヴロア，サン・シモン伯『新キリスト教。一保守主義者と一革新主義者との対話。第1対話』，パリ，1825年。
- ③〔注解〕「クレディ・モビリエ」—— Société générale du crédit mobilier. — フランスの株式銀行で，1852年にエミールとイザークのペレール兄弟によって創立され，1852年11月18日の布告によって法的に承認された。名称はフランスの商用語からきたものであった。容易に譲渡できる有価証券である「動産の有価証券〔valeurs mobilières〕」が長期債券の発行を保証するものとされたのである。クレディ・モビリエの主要目的は信用媒介と産業的およびその他の企業の創設とだった。同行は，フランス，オーストリア，ハンガリー，スイス，スペイン，ロシアでの鉄道建設に広範囲に参加した。その最大の収入源泉は，それによって創立された株式会社の有価証券での取引所投機だった。同行の株式は，同行の保有する他の諸企業の有価証券によって保証されていただけだったが，同行はこのような株式の発行によって資金を調達し，この資金をさらにまたさまざまな会社の株式の買い入れに用いた。このようにして，同じ一つの所有が2倍の大きさの架空資本の源泉になった。すなわち，当該企業の株式というかたちと，この企業に融資しその株式を買い取ったクレディ・モビリエの株式というかたちとである。ナポレオン三世の政府がその金融上の諸要求をクレディ・モビリエのもろもろの事業のさいに貫いたことによって，同行の信用は国家信用と癒合した。クレディ・モビリエはすでに産業資本と銀行資本とのかみ合いを示し，一種の親会社にまで発展していたので，クレディ・モビリエとともに形式的には金融資本の諸要素が発生した。／1867年に同行の破産が起こり，1871年には同行の清算が行なわれた。19世紀の50年代にクレディ・モビリエが新しい型の金融企業として出現したということの原因は，やりたい放題の株式取引や投機取引によって特徴づけられたこの反動時代の特特殊性にあった。クレディ・モビリエの例に倣って，中部ヨーロッパのいくつかの他の国でも類似の機関が設立され

た。マルクスはクレディ・モビリエの本質を『ニューヨーク・デイリ・トリビューン』に掲載された一連の論説のなかで暴露した。——カール・マルクス『フランスのクレディ・モビリエ』、『ザ・ニューヨーク・デイリ・トリビューン』、ロンドン、第4735号、1856年6月21日付、5ページ第4—5欄、を見よ。そのほかの論説は、『ニューヨーク・デイリ・トリビューン』の以下の諸号にある。——1857年5月30日付第5027号、4ページ第4—5欄、1857年6月1日付第5028号、4ページ第3—4欄、1857年9月26日付第5128号、4ページ第4—5欄。

[661] しかし、けっして忘れてはならないのは、第1には、相変わらず貨幣²⁹⁶⁾(貴金属の形態での)が①基盤であって、信用制度は事柄の性質上この基盤からけっして離脱することができないということである。第2には、²⁹⁷⁾信用制度は私人の手による②社会的生産手段(資本や土地所有の形態での)の独占を前提するということであり、信用制度はそれ自身²⁹⁸⁾資本主義的生産様式の内在的形態であるとともに他方ではこの生産様式をその²⁹⁹⁾可能なかぎりの最終の形態まで発展させる一つの³⁰⁰⁾媒体〔Vehikel〕だということである。

①〔異文〕「基盤〔Unterlage〕」←「土台〔Basis〕」

②〔異文〕「社会的」——あとから書き加えられている。

銀行システムは、形態的な組織や集中という点から見れば③、およそ資本主義的生産様式がつくりだす最も人工的な最も完成した産物である。それだからこそ、イングランド銀行のような機関が商業や産業の上に巨大な

296) 「() および後出の「) 」 → 「 — 」 および 「 — 」

297) 「信用制度〔Creditwesen〕」 → 「信用システム〔Kreditsystem〕」

298) 挿入——「一方では」

299) 「可能なかぎりの最終の」 → 「可能なかぎりの最高・最終の」

300) 「媒体〔Vehikel〕」 → 「推進力」

力を揮うのである。といっても、商業や産業の現実の運動はまったくこのような機関の領域の外にあるのであって、この運動にたいしてこのような機関はまったく受動的な関係にあるのであるが。たしかに、それとともに一般的な³⁰¹⁾簿記や社会的な規模での生産手段の配分の形態は与えられているのではあるが、しかしただ形態だけである。すでに見たように、個々の資本家の、³⁰²⁾①特殊の資本の平均利潤は、³⁰³⁾それが搾取する剰余労働によって規定されているのではなく、総資本が³⁰⁴⁾搾取する社会的剰余労働の量によって規定されているのであって、そのなかから³⁰⁵⁾特殊の資本はただ自分が総資本のなただで占める割合に応じてのみ自分の分け前を引き出すのである。このような、資本の³⁰⁶⁾「社会的な」性格は、信用・銀行システムの³⁰⁷⁾発展によってはじめて媒介され³⁰⁸⁾実現されるのである。他方ではこの信用・銀行制度はさらに前進する。それは産業資本家や商業資本家に社会のあらゆる処分可能な資本を、そして現実②すでに使用されているのではない³⁰⁹⁾資本³¹⁰⁾を用立てるのであり、したがってこの資本の貸し手も || ③403 | その充用者もこの資本の³¹¹⁾「所有者」でもなければ生産者でもないのである。このようにしてこの信用・銀行システムは資本の 662 私的な性格を止揚するのであり、したがって即自的に、しかしただ即自的にのみ、資本そのものの止揚を含んでいるのである。³¹²⁾

①〔異文〕「特殊の」←「個別〔的〕」

301) 「簿記」—— Comptabilität → Buchführung

302) 挿入——「あるいはそれぞれの」

303) 「それが搾取する」→「この資本が直接に取得する」

304) 「搾取する社会的剰余労働」→「取得する総剰余労働」

305) 挿入——「それぞれの」

306) 「「」および後出の「」」——削除。

307) 挿入——「十分な」

308) 挿入——「十分に」

309) 挿入——「潜在的な」

310) 「を」→「までも、」

311) 「「」および後出の「」」——削除。

②〔異文〕「すでに」——あとから書き加えられている。

③〔異文〕「403」←「395³¹³⁾」

【原注】3) ³¹⁴⁾すでに1697年に『イングランドの利子の若干の考察』で〔述べられている。〕【原注3)終り】

①銀行制度によって、資本の³¹⁵⁾分配は、私的資本家や高利貸の手から、一つの特³¹⁶⁾殊的業務、社会的な機能として、取り上げられている。しかしこれによって同時に³¹⁷⁾それは、資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる³¹⁸⁾最も能動的な手段となり、また恐慌や詐欺的眩惑³¹⁹⁾等々の最も有効な媒体の一つとなるのである。

①〔異文〕このパラグラフは、草稿では、次のパラグラフのあとにある。

++) という記号によってこの箇所に続くことが示されている。

さらに、³¹⁹⁾それは、貨幣をさまざまな形態の流通する信用で置きかえ

312) エンゲルス版では、ここで改行されていない。次のパラグラフの冒頭につけられた異文注にあるように、草稿では、ここに ++) という記号をつけ、次の次のパラグラフのあとに、同じ記号を先頭に置いて次のパラグラフとされているものが書かれている。草稿では、改行せずにここに次の次のパラグラフの部分が続いており、そのあいだに ++) という記号があとから割り込むように書き加えられている。このことから見ると、エンゲルス版が改行していないのは、マルクスの草稿の状態に合わせた適切な処理だったと見ることもできる。

313) 「395」——マルクスが脚注のなかで(本稿215ページ注解①および筆者注264を見よ)、このページを指して明確に394と書いていることから見て、このページははじめは「394」と書かれていたのではないかと思われる。

314) 「すでに1697年に『イングランドの利子の若干の考察』で〔述べられている。〕」——エンゲルス版では、本文のなかに、「すでに1697年に『イングランドの利子の若干の考察』で述べられているように」として組み込まれている。

315) 「分配 (Distribution)」→「配分 (Verteilung)」

316) 「それ」→「銀行と信用と」

317) 「最も能動的な (aktivst)」→「最も強力な (kräftigst)」

318) 「等々」——削除。

319) 「それ」→「銀行システム」

ることによって、貨幣は実際には労働とその生産物との社会的な性格の一つの特殊な表現³²⁰⁾でしかないということ、しかしこの性格は私的生産の土台に対立するものとしてつねに結局は一つの物として、他の諸商品と並ぶ特殊な商品として、現われざるをえないということを示している。³²¹⁾最後に、資本主義的生産様式からアソシエイトした労働の生産様式への移行にさいして信用システムが強力な槓杆として役だつであろうということは、少しも疑う余地はない。とはいえ、それは、ただ、³²²⁾この生産様式そのものの①他の大きな有機的な³²³⁾諸変化との関連のなかで一つの³²⁴⁾契機として役だつだけである。これに反して、社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてのもろもろの幻想は、資本主義的生産様式とその諸形態の一つとしての②信用制度とについての完全な無知から生まれるのである。生産手段が資本に転化しなくなれば（このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている）、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである1)。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続する³²⁵⁾（そして実際にこの生産様式の信用システムの土台をなしている）ので³²⁶⁾あって、ただ、あの³²⁷⁾「人気取り著述家」のプルドン、商[663]品生産は存続させておいて貨幣を廃止したいと思った彼だけが2)、③無償信用という奇怪なものを、この小ブルジョアの立場のはかない願望³²⁸⁾を、夢想することができたのである。

320) 「でしかない」→「にほかならない」

321) エンゲルス版では、ここで改行されている。

322) 「この」——削除。

323) 「諸変化〔changes〕」→「諸変革〔Umwälzungen〕」

324) 「契機」→「要素」

325) 「(」および後出の「)」——削除。

326) 「あって、」→「ある。」

327) 「(」および後出の「)」——削除。

328) 挿入——「の実現と称するもの」

- ①〔異文〕「他の」——あとから書き加えられている。
- ②〔異文〕「信用制度」←「信用」
- ③〔注解〕「無償信用〔Crédit Gratuit〕」——プルドンがくり広げた、無利子の信用の理論。[フレデリック・] バスティア, [ピエール-ジョゼフ・] プルドン『無償信用。Fr. バスティア氏とプルドン氏との論争』, パリ, 1850年, を見よ。

[662]【原注】1) ³²⁹⁾「信用が目的とするのは、一方の人々は産業の用具を所有して〔posséder〕ながらそれを充用する能力も意志もなく、勤勉〔industrieux〕である他方の人々は労働用具をなにも所有して〔posséder〕ないという社会のなかで、これらの用具をできるだけ容易な仕方
で、それらを所有している前者の手から、それらを充用できる後者の人々の手に移すということである。この定義によれば、①信用とは³³⁰⁾所有〔propriété〕が構成されている仕方の結果だ、ということに注目しよう。」
(³³¹⁾②『サン-シモン派の宗教。経済学と政治学』, 1831年, 45ページ。)つまり、信用はこの所有の構成といっしょになくなるわけである。

- ①〔注解〕この強調は、「所有」のそれを除いて、マルクスによるものである。
- ②〔注解〕[バルテルミ・プロスペール・アンファンタン]『経済学と政治学 (サン-シモン派の宗教)』, パリ [, 1831年]。

①②それら〔 〕 (今日の銀行)〔 〕が自分のなすべきことだと考えているのは、自分の外で行なわれる諸取引が自分に与える運動には従うが、これらの取引そのものに運動を与えることはしない、ということである。

329) 以下の原注は、エンゲルス版では、上のパラグラフに続けて本文のなかに組み込まれている。

330) 「所有〔propriété〕」——二重の下線が引かれている。

331) この出典は、エンゲルス版では、「『サン-シモン派の宗教。経済学と政治学』の45ページに言う」として、引用の冒頭に示されている。

言い換えれば、それらの銀行は、自分が資本を貸し付ける勤労者〔Travailleurs〕のもとで資本家の役割を果たすのである。」⁽³³²⁾同前、98ページ。)銀行自身が⁽³³³⁾統治〔Régime〕を引き受けるべきであり、そして④「指揮される経営と刺激される労働との数と有用性によって」(同前、101ページ)際立つべきであるという思想のなかには、④クレディ・モビリエが潜在している。同様に C.ペクールも、銀行(サン・シモン派が一般的銀行システム〔Système Général des Banques〕と呼ぶもの)が⁽³³⁴⁾生産を統制する〔gouverner〕⁽³³⁵⁾ことを要求する。総じてペクールは、サン・シモン派よりもはるかに急進的だとはいえ、本質的にサン・シモン派である。彼は、「信用機関が……国民的生産の全運動を統制すること⁽³³⁶⁾等々」を欲する。⁽³³⁷⁾「試みに、一つの国民的信用機関を創設し、この機関は、無所有の〔non-proprétaire〕有能者や有功者に融資はするが、しかしこれらの借り手を生〔663〕産や消費での緊密な連帯によって強制的に互いに結びつけるのではなく、反対に、彼ら自身に自分たちの交換や生産を統制させる、というようにしてみたまえ。このようなやり方で諸君が達成することは、ただ、今日すでに個人銀行〔banques privées〕が達成していること、すなわち無政府状態や生産と消費との不均衡や一方の人々の突然の破滅や他方の人々の突然の致富でしかないであろう。すなわち、諸君の機関にできることは、他方の人々が背負いこむ不幸の量と同じだけの幸福の量を一方の人々のために生み出すこと以上にはけっして出ないであろう。……ただ、諸君は、諸君が融資をしている賃金生活者たちに、ブルジョア的雇い主が行なっているのと同じ競争を互いのあいだで行なうための手段を与えたというだけのことでであろう。」(C.ペクール『社会・政治経済

332) この出典は、エンゲルス版では、「さらに98ページに言う」として、引用の冒頭に示されている。

333) 「体制〔Régime〕」→「指揮〔Leitung〕」

334) 挿入——「「」

335) 挿入——「」

336) 「等々」——削除。

337) 挿入——「——」

学の新理論』, バリ, 1842年, [433,] 434ページ。)【原注1)終り】

- ①〔異文〕このパラグラフは、草稿の403ページの下部と404ページの下部とに書かれている。マルクスは、++ という記号と「注1)へ」というメモ書きでこの箇所を指示している。
- ②〔注解〕この文の強調はマルクスによるものである。
- ③〔注解〕この引用部分のなかの強調はマルクスによるものである。
- ④〔注解〕「クレディ・モビリエ」——前出の注解〔本稿222ページ注解③〕を見よ。

【原注2) ³³⁸⁾私の『経済学批判』, ベルリン, 1859年, 64ページ。【原注2)終り】

すでに見たように、商人資本と利子生み資本とは資本の最も古い形態である。しかし、普通の観念では利子生み資本が①とりわけすぐれた意味での資本〔Capital *κατ' ἐξοχήν*〕の形態として現われるということは、当然のことである。³³⁹⁾なぜならば、商人資本の場合には、ある媒介的活動が³⁴⁰⁾あるのであって、それが詐欺と解釈されようと労働その他なんと解釈されようと、とにかくそういう活動が行なわれるの³⁴¹⁾だからである。これに反して、利子生み資本では、資本の自己再生産的性格、自己増殖する価値、剰余価値生産が、神秘的な〔occult〕質として②純粹に現われている。それだからこそ、一部の経済学者でさえもが、ことに産業資本がまだ十分には発展していない諸国、たとえば③フランスなどでは、利子生み資本を資本の基本形態として固執し、また、たとえば地代を、その場合に

338) 「私の」→「カール・マルクス『哲学の貧困』, ブリュッセルおよびバリ, 1847年。——カール・マルクス」

339) 「なぜならば」——削除。

340) 「ある」→「行なわれる」

341) 「だから」——削除。

も貸付という形態が優勢だという理由で、ただ利子生み資本の別の形態としか考えないということにもなるのである。こうして、資本主義的生産様式の内的編制はまったく見損われ、また、土地も、資本と³⁴²⁾まったく同様に、ただ資本家に貸し付けられるだけだということはまったく見落とされてしまう。貨幣のかわりに、現物での生産手段、たとえば機械や④営業用の建物などが貸し付けられるということももちろんありうる。しかし、そのような場合にはこれらの生産手段は一定の貨幣額を表わしているのであって、利子のほかに一部分は損耗分として支払われるということはこれらの資本要素の使用価値、それらの独自の現物形態から出てくるのである。決定的なことは、ここでもまた、それらが直接生産者に貸し付けられるか、それとも産業資本家に貸し付けられるか、ということである。前のほうの場合は、少なくともこの貸付が行なわれる部面では、資本主義的生産様式の非存在を前提しているのであり、あとのほうの場合³⁴³⁾が資本主義的生産様式の土台の上での前提なのである。個人的消費のための家屋などの貸付をここにもちこんでくるのは、より以上に不適當であり無意味である。労働者階級はこういう形でもだまし取られるのだということ、しかも非常に手ひどくだまし取られるのだということは、³⁴⁴⁾明らかである。しかし、これは、⑤労働者階級に生活手段を供給する小売商人によっても行なわれることである。³⁴⁵⁾(³⁴⁶⁾この形態は、生産過程そのもので⑥直接に行なわれる本源的な搾取 664 と並んで行なわれる二次的な搾取である。)

| ³⁴⁷⁾

①〔注解〕「とりわけすぐれた意味での〔κατ'ἐξοχήν〕」——〔MEGA〕519

342) 「まったく」——削除。

343) 挿入——「こそ」

344) 「明らか」→「明らかな事実」

345) 「(」および後出の「)」——削除。

346) 「この形態は〔diese〕」→「これは〔es ist dies〕」

347) エンゲルス版では、ここで改行されていない。

ページ20行への注解を見よ。³⁴⁸⁾

- ②〔異文〕「純粹に」——あとから書き加えられている。
- ③〔異文〕「フランスなどでは」——あとから書き加えられている。
- ④〔異文〕「營業用の建物」←「家屋」
- ⑤〔訂正〕「労働者階級に」—— ihr ← ihnen
- ⑥〔異文〕「直接に」——あとから書き加えられている。

|①404| 売ることと貸すこととの区別はここではまったくどうでもよい形式的な区別であって、このような区別は、すでに明らかにしたように、ただ現実の関連に³⁴⁹⁾たいするまったくの無知から本質的なものとして現われるのである。

- ①〔異文〕「404」←「395a」

³⁵⁰⁾類似の諸条件のもとでの、インドとイギリスにおける高利の利子〔Wucherzins〕とのあいだの比較は、ケアリの批判のところで行なう方がよい。

³⁵¹⁾現在(1865年10月)、国内流出の結果、〔イングランド〕銀行の操作〔Operationen〕(利子率の引き上げ〔Zinsenerhöhungen〕)が〔重ねられている〕。

348) この注解は、拙稿「銀行資本の構成部分」(『資本論』第3部第29章)の草稿について」のなかで訳出した(10ページ)が、そこにも付記したように、この語の注釈としてはきわめて奇妙なもので、参考になるようなものではない。マルクスがこの語をどのような意味で使っているかということについては同じ拙稿の10-13ページに記しておいた。

349) 「たいするまったくの無知から」→「たいしてまったく無知な者にとってのみ」

350) エンゲルス版では、この一文は削除されている。草稿では、この一文の先頭の欄外にインクによる花のようなかたちの書き込みがあり、またこの一文の先頭にはL型の、末尾には逆L型のしるしが付けられている。

351) エンゲルス版では、ここから本稿の最後まで部分は削除されている。

イングランド銀行の状態は次のようになっていて、利子率は7%〔である〕(1865年10月11日)(10月11日を取ったのは、〔イングランド〕銀行の状態の発表がこの日に行なわれたから①)。

①〔訂正〕「)」——草稿では欠落している。

①銀行券発行高	26,606,340
銀行部準備高	<u>4,294,145</u>
だから、流通にある銀行券は	22,312,195
 金鑄貨および地金(発行部の)	11,956,340
〔同じく〕銀行部準備高	<u>780,006</u>
地金の総計	12,736,346
 銀行部保有の銀行券準備高	4,294,145
地金準備高	<u>780,006</u>
〔銀行部の〕総準備高＝	5,074,151
 私的有価証券(手形等々) £	24,086,476
 預 金 政 府 £	7,228,737
民 間	<u>13,506,498</u>
〔預金〕総 計	20,735,235

①〔注解〕マルクスは以下の記載を³⁵²⁾1864-1866年のメモ帳から取った。出典は書かれていない³⁵³⁾。

352) このメモ帳に書き込まれているのは、1864-1866年のものだけではなく、1870年の6月のものも含まれている。このノートは、MEGA 第4部第18巻に収録されることになっている。

為替相場は順〔である〕。

9月末に〔イングランド〕銀行は割引率を4%から4¹/₂%に引き上げる。10月初頭には5%に、その数日後に6%に、そして10月7日に7%に(引き上げたのである)。|³⁵⁴⁾

(2002年1月9日)

正 誤 表

「利子生み資本」の草稿について(本誌第56巻第3号, 1988年)

41ページ下から3行 「capitalists」→「capitaliste」

「貴金属と為替相場」の草稿について(本誌第69巻第3号, 2001年)

1ページ上から3行 「第3第1稿」→「第3部第1稿」

2ページ下から4行 「第29章」→「第30-32章」

〃 下から3-2行 「「通貨原理」と1844年の銀行立法」の草稿について(第66巻第3号, 1999年)→「「通貨原理と1844年の銀行立法」(『資本論』第3部第33章および第34章)の草稿について(第67巻第2号, 1999年)」

13ページ上から14行 「金属柱か」→「金属鑄貨」

38ページ下から17行 「第2版でも,」→「第2版でも, その本文には」

96ページ上から10行 「筆者の中途」→「筆者の注と」

〃 〃 「おの注番」→「その注番」

102ページ上から11行 「①」→「①」

353) このメモには出典は書かれていないが、「1865年10月11日に至る週の勘定」という見出しがつけられている。その前のページには五つの引き算が書かれているが、そのうちの一つは、ここでの最初の部分に記載されている、〈銀行券発行高－銀行部準備高＝流通にある銀行券の量〉の計算である。

354) この次のページには「405」というページ番号だけが書かれている。この番号は、はじめ395bと書いたのちにそれを変更したものである。

On the Manuscript for Chap. 36 in Book III of “Capital”
by Karl Marx: “Pre-Capitalist Relationships” (I)

Teinosuke OTANI

《Abstract》

This article offers a thorough analysis of what Friedrich Engels presented in 1895 as 36th chapter on “Pre-Capitalist Relationships” in the Third Volume of “Capital”. In particular, this text is compared to its source which is to be found in the draft of Book III of “Capital”, that Karl Marx wrote in 1864/65. The author investigates the contents dealt with in these documents and adds a Japanese translation of Marx’s original writings based on text and annotations in the complete edition of the works of Karl Marx and Friedrich Engels, MEGA, vol. II/4.2. He also offers a detailed commentary on the relations between Marx’s original and the Engels’ edition, in particular on their differences.